2023年1月5日

みずほディーラーズアイ
（2023年1月号）

みずほ銀行

目次

米ドル相場 2
ユーロ相場 4
英ポンド相場 6
豪ドル相場 7
カナダドル相場 8
韓国ウォン相場 9
台湾ドル相場 10
香港ドル相場 11
中国人民元相場 12
シンガポールドル相場 13
タイバーツ相場 14
マレーシアリンギ相場 15
インドネシアルピア相場 16
フィリピンペソ相場 17
インドルピー相場 18

＊見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ:　USD/JPY　125.50　～　133.50

市場営業部　為替営業第二チーム　宮地　崇

■ 先月の為替相場

先月のドル/円相場は、138円台前半でオープン。ドル/円は前月下旬からのドル売りの流れに円高が進行、133円台ミドルレベルまで下落。2日に発表された米11月雇用統計では非農業部門雇用者数を中心に予想を上回る数字となり、ドル/円は一旦、136円台手前 まで急反発するも、米金利低下を受け134円台前半まで値を下げた。
第二週に入ると、5日に発表された米11月ISM非製造業景気指数が市場予想を上回り、ドル/円は136円台後半まで上昇。その後、小緩むも7日には、米金利上昇を横目に137円台後半を付けた。しかし、米第3四半期単位人件費（確報）が大きく下方修正されたことから、136円台半ばまで軟化。週末にかけて135円台半ばまで値を下げるも、9日に発表された米11月生産者物価指数、米12月ミシガン大学消費者マインド（速報）が予想を上回る内容であったことから、ドル/円は136円台半ばで越週した。
月半ばには、低調な米10年債入札を受け米金利上昇。ドル/円も137円台後半まで値を上げるも、13日に発表された弱い米11月消費者物価指数を契機にドルが反落、134円台後半まで急落。14日には、日銀が来年に金融政策の点検・検証を行う可能性があるとの一部報道に134円台半ばまで軟化。注目のFOMCでは予想通り+50bpの利上げを実施、来年の政策金利見通しが5%超となったこと等からドル/円は一時135.99円をつけるも、その後リセッション懸念も手伝い134円台後半まで反落した。15日には、ECB政策理事会にてタカ派スタンスが確認されるとユーロ買いドル売りとなり一旦値を下げるも、米株下落を起点とするリスクオフの動きにドルが急反発、ドル/円は138.18円まで急伸した。その後は、調整の動きに136円台後半でクローズ。
第四週には、19日に「政府と日銀が共同声明を改定する方針を固めた。」との一部報道に、ドル/円は136円近辺でギャップオープンして取引開始。その後、松野官房長官が同報道を否定すると137円台前半まで反発。しかし、20日には注目された日銀金融政策決定会合にてイールドカーブコントロール（YCC）を一部見直し、長期金利の許容変動幅を±0.5%程度へ拡大することが発表されると133円台前半まで急落。黒田日銀総裁が会見にて金融緩和政策継続を強調するも円高の流れは止まらず130.58円と2022年8月以来の安値を付けた。週末にかけては、米7～9月期GDP（確報）の上方修正や米金利上昇も手伝い133円台前半まで値を戻した。
最終週は、流動性が細る中、米金利の上昇にドル/円は134円台半ばまで上昇後、130円台後半まで反落。同水準で年内の取引を終了している。

■ 今月の見通し

1月のドル/円相場は、ドルの下値を探る展開を予想する。

12月のFOMCではほぼ予想通り+50bpの利上げを実施。それまで4回連続で+75bpの利上げペースにやや歯止めがかかった恰好となった。もちろん、今後の米経済指標の動向にもよるが、2月のFOMCでは+50bpか+25bpの利上げと利上げペースの鈍化が明確となる公算が大きい。足許、ECBを除く主要中銀からはこれまでのタカ派スタンスの修正が散見されることで、金利差に着目された円売りは調整色を強めるものと思われる。

また、先月の日銀金融政策決定会合ではYCCの一部見直しが発表され、市場は円高で反応した。今後、マーケットでは日銀金融政策決定会合自体はもとより政府・日銀の共同声明の改定や物価目標の見直しの思惑に加え、日銀総裁の後継問題も円高材料と捉えらえる可能性は大きく、当面は本邦金融政策に係る話題は、ドル/円の下押し要因として機能しそうだ。

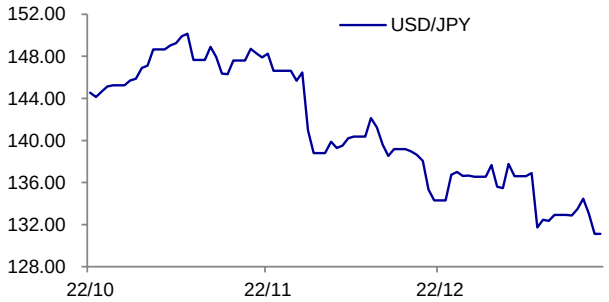
さらに、本邦需給環境については輸入企業のドル買い意欲が、資源価格の落ち着きを背景にやや一服。長期勢も概ねヘッジ手当を完了した模様である。一方、輸出企業に関しては急速な円高を受け、戻り売り意欲は相応にあるものと想定され、本邦の短期的な需給環境はややドル売りに傾斜しつつある印象である。これに想定を上回るインバウンド消費が、加わることを踏まえるとドル/円の上昇余地は限られよう。

一方、昨年アジア時間のドル買いを牽引したCNHの動向にも留意したい。足許のコロナ感染者増加が嫌気されCNH売りとなれば、こちらはドル/円の下値をサポートする材料となるかもしれない。

上記の材料を勘案すると、年初のドル/円相場は日米金融政策の変化と短期的な需給環境の反転を背景に、ドルの下値を探る展開を予想する。周知の通り、ドル/円の1月の相場動向がそのままその年の相場動向に反映されやすいというアノマリーも存在するなか、昨年の大相場直後の年初の相場動向には注目したいところだ。

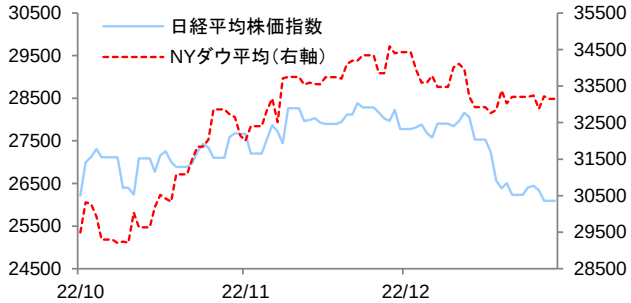
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/2	米ISM製造業景気指数	11月	49.7	49.0	50.2
12/2	米非農業部門雇用者数変化	11月	200k	263k	261k
12/2	米失業率	11月	3.7%	3.7%	3.7%
12/9	米ミシガン大学消費マインド	12月	57.0	59.1	56.8
12/13	米消費者物価指数(前年比)	11月	0.3%	0.1%	0.4%
12/14	FOMC	-	4.25-4.50%	4.25-4.50%	3.75-4.00%
12/15	米小売売上高(前月比)	11月	-0.2%	-0.6%	1.3%
12/15	米NY連銀製造業景気指数	12月	-1.0	-11.2	4.5
12/20	日銀金融政策決定会合	-	-0.100%	-0.100%	-0.100%

カスタマーディーラーの相場観、注目点（本編の内容とは必ずしも一致しません）

■ ドル/円 見通しまとめ

ブル	9名	135.00 ～ 127.50	ベア	10名	133.75 ～ 127.00

※ レンジは中心値

河合	ベア	136.00 ～ 128.00	黒田日銀総裁は否定しているが、本邦金融政策の出口戦略が意識され、年初、下値を探る展開を予想。
宮地	ベア	133.50 ～ 125.50	中旬に日銀金融政策決定会合を控えるなか、次の一手への警戒感が燻っており、基本的にドル/円の上値は重い展開を予想。加えて、短期的に本邦の需給環境もドル買い意欲が一服するなか、昨年のようなドルの急伸は考えづらい。
筒井	ブル	135.00 ～ 129.00	米インフレ動向と日銀金融政策スタンス解釈をめぐり、ボラタイルな市場環境を想定。米インフレ動向は賃金高継続、日銀は明確な円金利上昇まで踏み込めず、かつ本邦貿易赤字が着目され、現在溜まっている円高ポジションは解消される。
加藤	ベア	133.00 ～ 127.00	黒田総裁の言い方はどうあれ、日銀が追い込まれてきていることが1-3月の注目材料として浮き彫りに。日銀の金融政策正常化と、雇用に影響を見せてきた米国のオーバーキルというテーマは今月もドル/円の円高方向への調整圧力となる。
山崎	ブル	138.00 ～ 130.00	サプライズであった日銀の金融政策の軌道修正は、これまでの相場の方向感に影響を与えた。足元中国のコロナ政策の転換もあるが、これはプラスマイナス両にらみだが、ポジティブととらえれば、一旦は上方向の展開か。
伊藤	ブル	135.00 ～ 127.00	世界的インフレはピークをつけ、次第に景気後退に目線が移りつつある。昨年末の日銀サプライズでの円高は記憶に新しいが、政策変更を織り込むには時期尚早。ドル/円の上値が重くなったことは確かだが、引き続き米金利動向を注視。
山岸	ブル	135.00 ～ 127.00	ドル/円は高値151円台から20円以上下落。21年高値安値半値戻しも達成。米利上げ停止観測等による調整は一巡し、絶対的な日米金利差のドル買い、過去最大規模の本邦貿易赤字を背景とした需給円売りでドル/円は底堅い展開を予想。
尾身	ベア	133.00 ～ 125.00	米国の利上げ幅の縮小によるドル売りと、ターミナルレート引き上げによるドル買いに挟まれて動きづらい相場展開を予想。また、日銀の金融政策に対する変更期待もあると思うのでやや円買いが優勢か。
上野	ブル	134.00 ～ 127.00	事業法人は、来期予算策定中につき大ロフローは期待できず。前月政策変更を行った日銀金融政策決定会合は、今月は現状維持が基本線。今月は相場を動意づかせるイベント難ではあるが、足元のドル/円急落に伴う調整が入りやすい地合いか。
甲斐	ベア	132.00 ～ 128.00	18日に控えるBOJまでは円買い地合いが継続し120円後半の定着を予想する。それでも、1月BOJでの一段の変化がないことを確認すると、次第に2月FOMCを織り込み、月末にかけては再び130円前半まで戻す展開を予想する。
松永	ベア	134.00 ～ 127.00	日銀が金融政策を即座に修正する可能性は低いとみるが、緩和修正への思惑がくすぶる中、積極的にドル買いの動きは強まりにくい。FRBの今後の利上げ余地も小さく、ドル/円は上値の重い展開が継続するとみる。
小野崎	ブル	136.00 ～ 128.00	日銀のYCC許容変動幅拡大はサプライズではあったものの政策転換と捉えるには時期尚早。日米金利差は引き続き確保される中、昨年のようなスピード感は見込まないもののじりじりとドル買いの流れを想定する。
原田	ベア	135.00 ～ 125.00	先月のFOMCでは+50bpに利上げペースが鈍化。また、日銀金融政策決定会合ではイールドカーブ・コントロールのバンドを広げたことで、本邦の大規模金融緩和の出口が意識される中、ドル/円は引き続き軟調推移を予想する。
上遠野	ベア	133.00 ～ 126.50	米国の数少ない利上げ余地を慎重に探りにいく動きにドル上昇幅は限定的と見られる一方、日銀は12月のYCC変動許容幅修正に続き、金融緩和修正への観測が台頭。即座の修正は見込みにくくも憶測による下方向への振れ幅に警戒。
小林	ブル	135.00 ～ 127.50	日銀によるYCCの許容変動幅拡大を受け、円高へと振れているものの、次回FOMCでも追加利上げが予定されており、ドル/円は引き続き緩やかな円安を予想。一方で、日銀をめぐるヘッドラインへの神経質な値動きには留意したい。
逸見	ベア	137.00 ～ 128.00	日銀の出口戦略への警戒感が根強い中、米利上げの天井が意識される展開となれば、ドル/円は上値重い展開となろう。米インフレの高止まりや良好な雇用情勢を受けたFRBのタカ派化には警戒したい。
鈴木	ブル	135.00 ～ 127.50	日銀の政策転換への期待感は依然として高いものの、先月の円高進行はサプライズによる過剰反応であり、追加修正については時期尚早。顕在化している日米の金利差が再度意識され、円が売られやすい地合いを予想する。
木村	ブル	133.00 ～ 128.00	日銀の軌道修正を巡る混乱が続いており、マーケットでの消化も十分ではない状況から、月初は下値を探る展開が続くと見られる。しかし日米金利差の縮小幅自体は限定的であることから、その後徐々に値を戻す動きを想定する。
大熊	ベア	136.00 ～ 128.00	米利上げの3月打ち止め観測は根強い一方で、日銀は追加金融引き締めへの思惑が燻り、日米の金利差縮小が意識され始めている。足許の経済指標の軟化から米景気減速も懸念され、ドル/円は上値重い展開を予想。

ユーロ相場

予想レンジ:

EUR/USD	1.0450	～	1.0900
EUR/JPY	134.50	～	145.00

市場営業部　為替営業第二チーム　小林　元子

■ 先月の為替相場

12月のユーロ相場は一時約半年ぶりの水準となる1.07台前半まで上昇。
月初1日、1.04付近でスタートし、米経済指標の軟調結果や米長期金利低下に伴うドル売りが支援材料となり、1.0534まで急伸。2日、米11月雇用統計の結果を受けて1.0430まで下落。その後買い戻され1.0541で越週した。
5日、前週末からのドル売り相場の中、一時1.0595まで上昇するも、堅調な米経済指標の結果を受け1.04台後半に下落。6日、一時1.05台を回復したものの、次第にリスクオフ地合いからドル買いが強まると再び1.04台後半まで反落。7日、実需のドル買いや米金利上昇を受け、一時1.0444まで下落。その後ユーロ圏7～9月期GDPが市場予想を上回ったことや、軟調な米経済指標を受けて、再度1.05台を上抜けた。8日、9日は米金利の動向をにらみつつ1.05台前半でのもみ合い推移となった。
12日、1.05台前半で動意薄な展開。13日、米11月消費者物価指数(CPI)の弱い結果を受け、一時1.06台後半まで上昇。14日、FOMC後にはドルが買われる場面もあったが、ドルの戻り売りに押され1.06台後半まで上昇。15日、ドル買い相場の中じりじりと下落するも、ECB政策理事会でインフレ見通しが引き上げられ、ラガルドECB総裁がインフレへの強い警戒感を示したことやECBの今後の利上げ観測の高まりから、約半年ぶりの水準となる1.0737まで急騰した。その後はリスクオフのドル買いが強まり1.06台に下落した。16日、前日のECBにおける積極的な金融引き締めの長期化がユーロ圏への景気悪化懸念からユーロ売りの展開となり、1.0584で越週した。
19日、ドイツの堅調な経済指標や、デギンドスECB副総裁の2023年以降も+50bp利上げ継続を示唆する発言を受けてユーロ買いが強まり1.06台後半まで上昇。その後1.05台後半まで押し戻された。20日、日銀のサプライズ的なイールドカーブ・コントロールの許容変動幅拡大を受けて上下するも、1.06台前半まで上昇した。21日、ドイツの堅調な経済指標が好感されたものの、対円でのドル買い戻しの動きが波及し上値重く1.06付近に反落。22日、米金利低下を背景に1.0659まで上昇するも、その後の米7～9月期GDP(確報)の堅調な結果を受けて1.0573まで下落。売り一巡後は反発し1.06台を回復。23日、欧米勢の週末連休を控えた慎重ムードに上値は限定的となり、1.0615で越週した。
26日週は、年末年始で参加者が限定的となる中、1.06台でのもみ合い推移が続いた。年末にかけてはじり高に推移し、1.0715レベルで越年した。

■ 今月の見通し

1月のユーロ相場は、上値重い展開を予想する。

先月のユーロ相場は、上旬にかけては軟調な米経済指標の結果を受けてユーロ買いが優勢の展開。12月15日に開催されたECB政策理事会では、政策金利を+50bp引き上げ、2.50%とした。前回会合の+75bpの利上げ幅から縮小されたものの、声明文では、「今後も安定したペースで大幅に利上げを実施する必要がある」と発表され、また、ラガルト総裁も記者会見にて「今後も+50bpの利上げを継続していく可能性もある」と発言するなど、タカ派な内容と受け止められた。ECB理事会における今後の利上げ観測の高まりから、ユーロ/ドルは一時約半年ぶりの水準となる1.0737まで急騰した。しかしながら、ECBによる金融引き締めの長期化がユーロ圏への景気悪化への懸念から、ユーロ/ドルは反落した。その後も欧米の経済指標の結果や、米金利をにらみながら高値圏でもみ合い推移が継続。年初3日に発表された独12月CPIが前年比+9.6%の上昇となり、2か月連続で伸びが鈍化したことを受け、ユーロ/ドルは1.05台前半まで売られる場面が見られた。

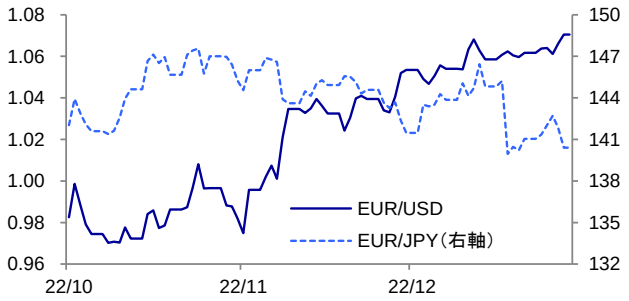
欧州圏におけるインフレのピークアウトが確認されているものの、依然と高い水準となっていることは事実。FRBを含めた主要各国の金融引き締めペースが鈍化していく中、ECBはFRBよりも長期的かつ大幅な金融引き締めを実施していくことが見込まれており、ECB理事会メンバーによるタカ派発言や良好な欧州圏経済指標がユーロの買い材料となろう。

一方で、12月のユーロ相場の値動きから見て取れるように、ユーロ圏におけるインフレのピークアウトが示されていることや、金融引き締めの長期化が欧州圏の景気低迷につながると懸念されている。また、エネルギー価格の下落により、ユーロ圏の貿易収支の大幅な悪化が免れている状況だが、地政学リスクの激化等によりエネルギー価格が再び高騰した場合は、欧州圏の景気低迷の一因となり、ユーロ下落リスクと想定され、留意したい。

上述の通り、金融引き締めペースの鈍化が見込まれているFRBに対し、ECBでは長期的かつ大幅な金融引き締めを公言しており、ユーロ買い要素となるも、欧州圏におけるインフレのピークアウトや、景気低迷懸念、地政学リスク等により、ユーロ/ドルは積極的な上値追いの展開は難しいと想定する。

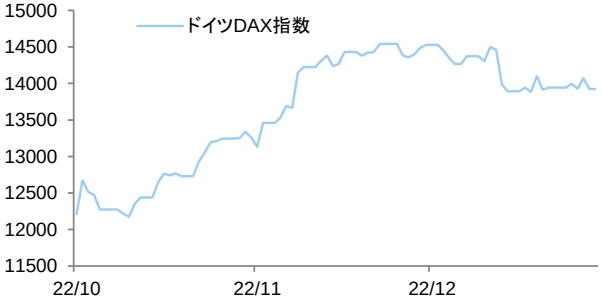
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	ユーロ圏失業率	10月	6.6%	6.5%	6.6%
12/2	ユーロ圏PPI(前年比)	10月	31.7%	30.8%	41.9%
12/5	ユーロ圏小売売上高(前年比)	10月	-2.6%	-2.7%	-0.6%
12/7	ユーロ圏GDP(前期比)	3Q	2.1%	2.3%	2.1%
12/15	ECB主要政策金利	12月	2.5%	2.5%	2.0%
12/16	ユーロ圏CPI(前年比)	11月	10.0%	10.1%	10.0%
12/19	独IFO企業景況感指数	12月	87.5	88.6	86.3
12/21	ユーロ圏消費者信頼感	12月	-22.0	-22.2	-23.9
12/21	独GfK消費者信頼感	1月	-30.0	-37.8	-40.2
1/3	独CPI(前年比)	12月	9.0%	8.6%	10.0%

カスタマーディーラーの相場観、注目点（本編の内容とは必ずしも一致しません）

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	15名	1.0900 ～ 1.0400	ベア	4名	1.0725 ～ 1.0250

※ レンジは中心値

河合	ブル	1.1000 ～ 1.0400	利上げペースの減速が確認されたFRBとは対照的にECBのタカ派スタンスを背景とした欧米金利差縮小が意識され、EUR堅調な展開を予想。
宮地	ブル	1.0850 ～ 1.0450	前回のECB政策理事会において当局が、タカ派スタンスを明確にしたことは記憶に新しいところ。対してFRBの利上げペースの縮小が材料視される展開も想定される状況下、ドル売りの流れは当面継続か。
筒井	ベア	1.0700 ～ 1.0200	米の賃金高と欧州の景気悪化が再注目されるシナリオをメインとする。ECBはインフレへの対処・金利引き上げスタンスを明確にしているが、その正当性に市場が疑念を抱き、景気悪化シナリオを織り込むだろう。
加藤	ブル	1.0800 ～ 1.0300	暖冬にも助けられエネルギー問題にある程度の安心感が生まれている一方、ブンデスバンク以来のインフレファイターの伝統を継承しているECB は、インフレへの警戒感を緩める様子はないことからユーロ/ドルは堅調推移継続を予想する。
山崎	ブル	1.0880 ～ 1.0400	ECBの金融政策の変更により順調に上昇を継続中。足元燃料価格の上昇も落ち着きを見せていることからも、EUR通貨の上昇ペースも一服か。ウクライナ問題の動向には注視したいが、引き続きゆるやかな上昇を予想。
伊藤	ベア	1.0800 ～ 1.0200	インフレに対するECBのタカ姿勢は、利上げ終着が見えてきたドルに対して強含みやすい。金利上昇が素直にEURの上昇を促すことに疑問は残る。スタグフレーションが今まで以上に意識される中、EURの上値は徐々に重くなるだろう。
山岸	ブル	1.0900 ～ 1.0200	ユーロ圏インフレは依然2桁近い水準で、コア指数やサービス物価も高止まり。ECB高官からはタカ派発言が相次ぎ、市場が織り込む1.5%程度の追加利上げ＋3月 着手のBS縮小による金融引き締めが進み、ユーロは堅調な推移を予想。
尾身	ブル	1.1000 ～ 1.0300	FRBの利上げ幅縮小によるドル売りにより、ユーロの上昇基調は継続すると予想。但し、ECBも利上げ幅縮小の可能性やユーロ圏におけるインフレピーク説などもあり、上昇は限定的か。
上野	ブル	1.0850 ～ 1.0450	相場を動意づかせる材料に乏しく、欧米の消費者物価指数l等の指標を確認しながらの一喜一憂する相場となりそう。とは言え、相場のトレンドとしては米国対比利上げ余地が大きいユーロが相対的に買われやすい状況は不変か。
甲斐	ベア	1.0600 ～ 1.0450	独消費者物価指数の鈍化期待から一段のユーロ買いの可能性は低まった印象。膠着感のあるロシア・ウクライナ情勢が1年経過を前に一段激化する可能性や、2月FOMCにかけて再びドル買いが高まる可能性もあり、上値の重たさを予想。
松永	ブル	1.0750 ～ 1.0400	ユーロ圏の景気後退懸念は燻るものの、短期的には引き続きECBのタカ派スタンスがユーロをサポートすると想定。エネルギー価格の安定も好感視されユーロドルは底堅い動きが継続すると想定する。
小野崎	ブル	1.1000 ～ 1.0300	利上げの終焉が見えてきているFRBに対しECBの利上げ姿勢は継続。欧州地域での懸念点は散見されるものの、金融政策を背景にEUR買いが優勢となるものと見込む。
原田	ブル	1.0900 ～ 1.0250	米金利上昇の流れは一服しつつある中、先月のFOMCによる+50bp利上げも後押しし、ユーロ上昇基調は継続すると予想する。一方で、ユーロ圏におけるインフレも落ち着きを見せる中、上値も限定的に留まる公算。
上遠野	ブル	1.0800 ～ 1.0450	物価上昇にピークアウト感は否めずも依然高水準で推移しており、ECBのタカ派スタンスについては変更期待薄。強きの引き締めに対しては欧州経済下押し懸念と攻防しつつも、利上げ終了を目前にした米国との対比からも対ドル強含みか。
小林	ブル	1.0900 ～ 1.0450	金融引き締めペース鈍化が見込まれている米FRBに対し、ECBは長期的かつ大幅な引き締めを公言しており、金融政策という観点でユーロ買いとなろう。一方でユーロ圏の景気低迷懸念により上値重い展開となるか。
逸見	ブル	1.1000 ～ 1.0300	米利上げの天井が意識される中、欧州の利上げは継続する見込み。経済が耐えうるか疑問は残るものの、じり高の展開を想定。
鈴木	ブル	1.0900 ～ 1.0400	米金利の上昇に一服感がみられる中、ECBはタカ派スタンスを継続。リセッションやウクライナ情勢など、引き続き懸念材料は多いものの、対米での金利差縮小が意識され、堅調推移となることを予想する。
木村	ベア	1.0750 ～ 1.0300	10月からのユーロ/ドルの切り返しが一服し膠着感が強い印象。ECBの金融正常化が雇用に与える影響を警戒して労働市場の経済指標への警戒感が強くなっているため、上値の重い推移を予想する。
大熊	ブル	1.0900 ～ 1.0300	ウクライナ情勢は未だ先行き不透明ではあるものの、欧州の温暖な気象予測や代替手段としての風力発電の強化等もありエネルギーへの懸念は後退している。ECBによる複数回の+50bp利上げ実施観測も後押しとなり、底堅い推移を予想。

英ポンド相場

予想レンジ：

GBP/USD	1.1600	～	1.2400
GBP/JPY	154.00	～	165.00

欧州資金部　神田　史彦

■ 先月の為替相場

先月のポンドは対ドルで小さく往ってこい、年初からは約10%以上の下落となった。
月初対ドル1.20台で始まったポンドは、11月末のパウエルFRB議長の利上げ幅抑制示唆と弱い米経済指標を背景に一気に1.23台へ上昇する立ち上がり。2日は米11月雇用統計の堅調な結果に1.21台へ押される。明けて5日の週はその翌週にFOMCと英中銀政策発表を控えた様子見から方向感の出にくい展開。13日、米11月消費者物価指数が予想比下振れしドル売りに1.24台まで上昇。14日は1.2446の月中高値をつけるもFOMC後に1.23台へ下落。15日はFOMCのタカ派的な結果を消化しながらドル買いが進む中、英中銀が予想通り政策金利を3.50%へ+50bp利上げするとポンド売りが強まり1.21台半ばまで下落。そこからポンドは上値重い推移が続く。対ユーロでみて英中銀発表前は0.86前後で推移していたが、月末に向けて0.88近辺にポンドは下落するなど、ポンドの劣勢は明らかだった。じりじりと値を下げ、22日には月中安値となる1.1993をつける。その後は市場参加者がクリスマス休暇に入る中、方向感なく推移。概ね1.20台でのもみ合いが続き年末を迎えた。一方で対円では大きく円高へ動いた。日銀の政策修正にかかる円高の進行に加えてポンドが弱めであったこともあり月中レンジは158円台～169円台と実に10円程度に及んだ。160円台を割れて年末を迎えた。

■ 今月の見通し

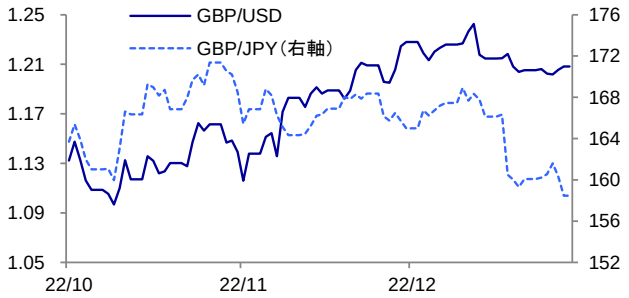
ポンドは引き続き上値重い推移を見込む。
各国中央銀行の利上げペースもピークアウトに向かう中、最終的な政策金利の見込みもある程度為替レートに織り込まれた。そのような中で大きなサプライズだったのは、やはり日銀の政策修正。とはいえ、それがポンドの対ドルでのレートへの影響は限定的でドル/円の動きにつれたポンド/円のレートに注目が集まりそうだ。通貨オプション市場で観測されるインプライド・ボラティリティは1か月で対円でおよそ上下5円（3%程度）以上の値動きを見込んでおり、値幅的には先月並みの変動率は覚悟している模様（ちなみに対ドルでは上下2.5%程度の変動を見込んでいる）。また、ポンドと同様の動きをすることの多いユーロに対して、ポンドが相対的に安くなっていることも注目を集めている。米国に比べ、燃料価格や地理的な近さからウクライナでの戦争の影響を受けやすいことが従前より指摘されており両通貨が対ドルで弱含む2022年であったが、直近のポンドのアンダーパフォームはやはり英経済の混乱懸念がより大きいことを受けてのことだろう。2022年9月末に誕生したトラス政権の発表した大衆迎合的な財政計画が英国債の暴落を招き同政権は早々に退陣。後を継いだスナク政権は一転して緊縮財政を進めている。FRBに比べハト派的とされる英中銀も、高騰する物価に対応するため粛々と利上げを進めており、モーゲージ利率などを通して消費者マインドへ大きく影響を与えている。またブレクジット後の労働力の流出による低い失業率の一方での物価高騰から、公共セクターでのストライキも目立つ（年末には鉄道・空港・医療スタッフがほぼ同タイミングでストライキを決行しており連日報道されていた）。
なお、次回のFOMCが2月1日、英中銀政策発表は2月2日と今月は予定されていないが、今月の経済指標がこれまでの見通しに変更を生じさせるときはポンドの上方リスクが高まる。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地のワールドカップ事情』
結局、故郷には約一か月間滞在することとなり、その間束の間ではあったが実家で暮らすこととなった。小学生の頃からその場に佇む机や、壁に掛けられた色の薄れた図画工作、受験時代を共にした昭和歌謡のCD等、部屋に散らばる現在では意味を持たない一つ一つの物を媒体とし、当時の僕と交信ができてしまう様な不思議な空間で、僕は毎日眠りにつき、そして目を覚ました。小さい頃に通った近所の靴屋には、新調する度に僕の足のサイズが大きくなったと喜んだ、髪の薄くなった店主の姿を見かけ、ラーメン屋の店主は油の拭き残ったカウンターに肘をつきながらテレビに夢中になり、人柄はとても温かいが髪を切るのが不得意だった散髪屋のお兄さんは昔と変わらずに真剣な表情で鋏を握っていた。昔は冬の季節でも半ズボンで走り回ったそんな変わらぬ街並みを、僕はコートを羽織りながら歩いた。旧友にも会うことができた。僕にテキーラや銀座の居酒屋を教えたサークル同期Nとは、銀座でおでんを突きながら熱燗を交わし、今も収まらぬNのやんちゃ話に花を咲かせた。先輩Tは驚くほどに減量しマスク越しには人物の判別が付かないほどであったが、飲みっぷりは衰えず、互いに銀座の街に記憶と領収書を埋めることとなった。マスク着用を機に髭を蓄えた同じく先輩Sは、いつものことながら流れ星の様に乃木坂の金曜日に散ることとなった。夕暮れ時に街中に響く町内放送に誘われ自宅へ戻る帰り道、家々から漂う料理の香りやカーテン越しに映る家族の姿を目にし、そんな時に感じる逆らってはならぬ人間の生き方を胸中の手土産に、僕は再び元居た場所へと戻ることとなった。新たに見つけた割烹でスコッチを口にし、僕の先に待ち受ける、グラスに対流するウイスキーのように行先の定まらぬ旅を想像しながら、遠く海の向こうで一足先に鳴り響く新年の鐘の音に思いを馳せることになる。

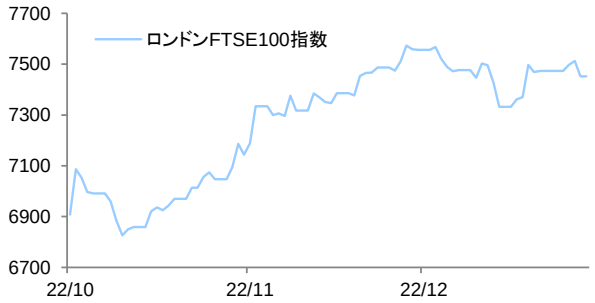
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	製造業PMI	11月	46.2	46.5	46.5
12/5	サービス業PMI	11月	48.8	48.8	48.8
12/6	建設業PMI	11月	52.0	50.4	53.2
12/12	GDP(前月比)	10月	0.4%	0.5%	-0.6%
12/12	鉱工業生産(前年比)	10月	-2.5%	-2.4%	-3.1%
12/13	ILO失業率	10月	3.7%	3.7%	3.6%
12/14	消費者物価指数(前年比)	11月	10.9%	10.7%	11.1%
12/15	英中銀政策金利		3.50%	3.50%	3.00%
12/16	小売売上高(含自動車/前年比)	11月	-5.6%	-5.9%	-5.9%
12/16	製造業PMI	12月	46.5	44.7	46.5

豪ドル相場

予想レンジ:

AUD/USD	0.6600	～	0.6890
AUD/JPY	86.00	～	92.00

アジア・オセアニア資金部　シドニー室　川口　志保

■ 先月の為替相場

12月上旬の豪ドル相場は下に往って来いで推移。米10月個人消費支出(PCE)コアデフレーターや米11月ISM製造業景気指数が弱含んだ後、米11月雇用統計が予想を上回ると、ドル買いが進み0.6743まで下落。しかし米利上げペース減速期待が後退する程の内容ではなかったことから0.6794まで上昇し、一時9月来高値の0.6851まで上昇した。米11月ISM非製造業景気指数が予想外に好転したことを受けてFRBによる大幅利上げ観測が再燃し、米金利上昇、株安・米ドル高の展開となると豪ドルは0.6690近辺まで下落。6日、RBA理事会では+25bp利上げを決定し政策金利を3.10%とした。声明文では、利上げ停止を示す内容がほぼ見られず、想定よりややタカ派と捉えられ豪金利は大きく上昇。但し豪ドルは0.67台前半でもみ合いとなり、反応は限定的となった。8日、軟調な株式市場を背景に一時0.67割れとなるも、米週次新規失業保険申請件数が前週比増加し、2022年2月以来の高水準となったことでFRBの利上げペース減速が意識され、米ドル安の反応に。豪ドルは0.6770近辺まで上昇。その後は0.67半ばを挟んで推移した。

中旬は米11月消費者物価指数でインフレピークアウトが示唆され、米金利低下とともにドル売り優勢となり豪ドルは一時0.6893まで急騰した。FOMCでは市場予想通り+50bp利上げを決定。発表直後に豪ドルは0.6812近辺まで下落も、すぐに買い戻され、往ってこいとなった。15日、豪11月雇用統計は市場予想を上回るも豪ドルへの影響は限定的となった。その後、中国11月小売売上高等が下振れ、リスクオフのドル買いが強まり豪ドルは0.6677まで下落。その後は0.66台後半で推移した。

下旬はホリデームードで閑散とする中、19日は豪ペニー・ウォン外相が20日に北京を外交訪問するとの報道で僅かに上昇。20日は日銀金融政策決定会合で長期金利誘導水準の許容変動幅拡大が発表され、サプライズを受けて円買い、米ドル売りの流れから豪ドルは0.6690近辺から50pips上昇し、その後は豪ドル/円の売りに引っ張られる形で0.6630近辺まで下落した。12月RBA会合の議事録では政策引き締めサイクルを今月停止する事が検討されたものの、それを正当化する経済データが得られなかった為見送ったとされていた。加えて、追加利上げを見込んでいるが、利上げ幅とタイミングは今後のデータ次第と繰り返した。年末にかけては流動性が薄い中、中国がゼロコロナ計画を発表した事が材料視され、香港株等が堅調に推移すると、豪ドルが支えられ0.68台前半まで上昇した。

■ 今月の見通し

今月はFOMC並びにRBAの金融政策決定会合がなく、これまでの中銀による積極的利上げに対しインフレ上昇圧力がどの程度落ち着き始めているのかや今後の政策軌道について再評価する時期になろう。

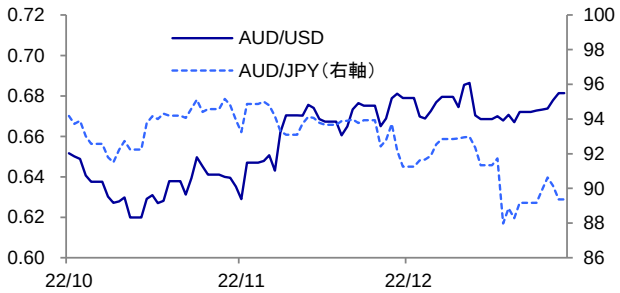
FRBは12月のFOMCにおいても利上げ継続姿勢を表明しているが、市場はそれを徐々に材料視しなくなってきており、ドットプロットが上方修正された事よりもどちらかと言えば利上げ減速の政策シフトに対して敏感に反応している。一方、RBAは12月会合にて引き締めサイクルの停止が検討されたものの、豪国内経済データは依然として堅調に推移しており、現在の逼迫した雇用環境下ではインフレ圧力は未だに燻る。これらを踏まえるとドル売り、豪ドル買いの傾向にあり、2022年のリバースフローが続くと推察する。市場の焦点は2国間金利差でなく、今後の中銀の政策修正の軌道へシフトしてきているが、その政策軌道を確認するためにも1月4日(米国時間)発表のFOMC議事要旨(12月会合分)、並びに1月6日(米国時間)発表の米12月雇用統計を注視したい。

一方、日銀の金融政策においては再び引き締めへの政策が意識されている事から、円高傾向が続くとみられ、豪ドル/円下落からの豪ドル重しにも注意したい。

この他、中国がゼロコロナ政策を撤回した事で中国からの回復需要が見込めるとの憶測から一時リスクオンとなり株価や豪ドルを支えていたが、一方で世界中での感染拡大につながるとの警戒感や、ゼロコロナ政策を解除した事でインフレに拍車がかかるのではとの懸念も燻る。故に豪ドルはレンジを大きくは抜けられないとみる。

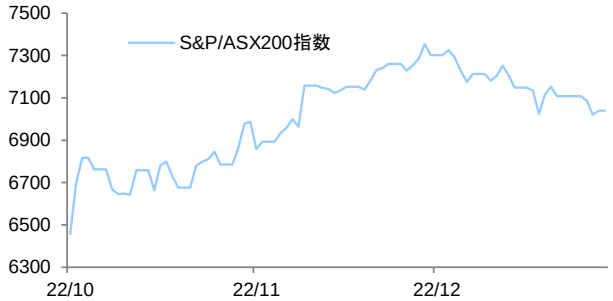
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	コアロジック住宅価格	11月	-	-1.1%	-1.1%
12/6	RBAキャッシュレート	-	3.10%	3.10%	2.85%
12/8	貿易収支	10月	A$12000m	A$12217m	A$12444m
12/15	雇用者数変化	11月	19.0k	64.0k	43.1k
12/15	失業率	11月	3.4%	3.4%	3.4%
12/20	RBA議事録要旨	12月	-	-	-
12/21	ウエストパック景気先行指数	11月	-	-0.13%	-0.02%

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD	1.3300	～	1.3800
CAD/JPY	91.00	～	103.00

米州資金部カナダ室　岩田 保子

■ 先月の為替相場

12月はカナダ中銀、FRB、ECB、日銀等、主要中央銀行の会合が相次いで行われたが、為替市場では10月まで見られたUSDの一方的な上昇の勢いが弱まり、USD/CADは1.3500から1.36台後半でのレンジ取引で推移。
月初は、パウエルFRB議長が、利上げ幅を縮小する時期が「早ければ12月」と、ハト派ともとれる発言をしたことから、米金利が急速に低下、USD売りが進み、USD/CADは1.3385まで下落。その後、5日に発表された米11月ISM非製造業景気指数が強かったことから、市場ではFRBの利上げが継続するという見方が強まり、USDが買い戻され、USD/CADも1.36台へと上昇。
7日のカナダ中銀会合では+50bpの利上げが決定され、政策金利は3.75%から4.25%へと引き上げ。声明文では、これまでの、「金利はさらに引き上げる必要がある」との文言から、「今後は政策金利をさらに引き上げる必要があるかどうか熟考する」に変わり、今後の経済状況によっては、今回が最後の利上げになりうる可能性も示唆された。このカナダ中銀の決定を受けて、CAD売りが進み、USD/CADは一時1.3700をつけるものの、翌週の米11月消費者物価指数(CPI)発表とFOMCを控え、1.36台での取引が継続。13日に発表された米11月CPIはヘッドライン、コアともに前月から鈍化し、米金利が大きく低下するなか、USD売りが加速、USD/CADは一時1.3522まで下落した。14日のFOMCでは、FRBは市場の予想通り+50bpの利上げを決定し、2023年末の政策金利見通しは中央値が2022年9月時点の4.625%から5.125%に引き上げられ、市場予想を上回った。さらにパウエル議長は記者会見で、タカ派的なスタンスを改めて示したが、USDの大幅な上昇は見られず、USD/CADは1.35台にとどまった。
16日にはFRBに続き、ECBも利上げとともにタカ派的姿勢を示したことから、今後世界的に金融引き締めが一段と強まるとの見方から、株式と原油価格が大きく下落、リスク回避のUSD買い優勢となり、USD/CADも再び1.36台へと上昇。
20日には日銀がイールドカーブ・コントロールにおける10年国債利回りの変動許容幅を従来の上下0.25%程度から同0.50%程度に拡大したことで、円が主要通貨に対して急伸し、CAD/JPYも今年3月以来となる96.72をつけた。
月末にかけては、クリスマス休暇で市場参加者が少なくなる中、USD/CADは対円でのUSD売りに加え、米国の消費者の期待インフレ率の低下、原油価格の上昇等を背景にUSD安が進み、1.35台半ばでクローズした。

■ 今月の見通し

2022年12月21日に発表されたカナダ11月CPIは総合で前年比+6.80%と前月から低下したが、コア(中央値)は同+5.00%となり、前月(同+4.90%)から上昇。項目別にみると、ガソリン価格は前月から低下したものの、モーゲージの利払い、レント、食料品の値上がりが顕著であった。
次回カナダ中銀会合(1月25日)前には、12月CPIに加え、カナダ中銀による企業及び消費者のインフレ期待率の調査結果が発表されることから、これらの結果が1月カナダ中銀会合での決定に大きな影響を及ぼすことが予想され、高止まりが確認された場合、+25bpの追加利上げも考え得る。
ただし、米国と比べた場合、米国の労働市場のひっ迫が続き、賃金が上昇し続ける限りは、FRBはカナダ中銀以上にタカ派の姿勢を維持することが予想されるため、少なくとも2023年1～3月期は、カナダとの金利差が縮小に向かうことは想定しづらい。1月のUSD/CADのレンジは、1.3300～1.3800と予想する。

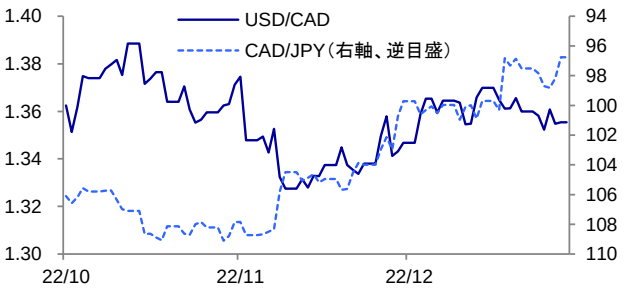
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のワールドカップ事情』
W杯開幕直前に日本とカナダのテストマッチが行われたので、記憶にある方は多いかもしれませんが、今回、カナダは36年ぶりにW杯出場を果たしました。北中米カリブ海予選を常連のメキシコ、アメリカを差し置き首位で突破、また次回2026年W杯が北米3カ国共通開催となり、カナダの都市(トロント、バンクーバー)のスタジアムでも試合を行われることもあって、メディアも含めて今まで以上に注目度は高かったといえます。カナダの国民的人気スポーツはなんといってもアイスホッケーなのですが、南米などサッカー強豪国出身の移民も増えているため、国内のサッカー熱の高まりも感じています。もちろん多くの人々がカナダ代表チームを応援するのはもちろんですが、みずほの拠点があるトロントは非常に多様な国から人々が集まっている都市です。W杯開催中にとても興味深く感じたのは、こちらではマイカーにカナダ国旗などを掲げる車を普段からよく見かけますが、W杯開催中はブラジル、ポルトガル、モロッコ、クロアチアなど、応援する自分や家族の出身国の旗を掲げた車を見ることができ、トロントが移民の街であることを改めて実感しました。またアルゼンチンが優勝した際は、ラテン系が多く住むエリアやコミュニティは盛り上がり、陽気に喜んでいる姿をみて私たちも元気をもらうことができました。2026年W杯では、ここカナダで日本代表チームを直接応援して、見たことのない景色が見れることを願っています。

柏木広樹

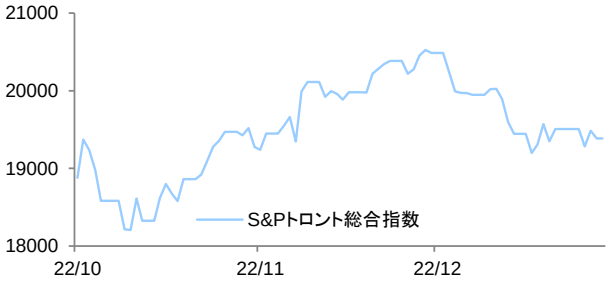
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	S&Pグローバルカナダ製造業PMI	11月	-	49.6	48.8
12/2	ネット雇用変化	11月	10.0k	10.1k	108.3k
12/2	失業率	11月	5.3%	5.1%	5.2%
12/6	貿易収支	10月	0.9b	1.21b	0.61b
12/14	鉱工業売上高(前月比)	10月	2.0%	2.8%	0.1%
12/15	住宅着工件数	11月	259.0k	264.2k	264.6k
12/20	小売売上高(前月比)	10月	1.5%	1.4%	-0.6%
12/21	CPI(前年比)	11月	6.7%	6.8%	6.9%
12/23	GDP(前月比)	10月	0.1%	0.1%	0.2%
12/23	GDP(前年比)	10月	3.1%	3.1%	3.9%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1230	～	1290
KRW/JPY	10.204	～	10.753
JPY/KRW	9.300	～	9.800

（注）100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室　中野 博文

■ 先月の為替相場

12月のドル/ウォン相場は月後半に下落した。11月30日海外時間に行われたパウエルFRB議長講演では、インフレ低下にもっと証拠が必要との発言をしつつも、早ければ12月にも利上げペースが減速する旨を示したことで、米金利は全年限で15bp以上の大幅低下。これを受け1日のドル/ウォンは1301.0にてオープン。ただ、半導体市況の悪化に伴う韓国10月貿易収支（結果:▲$7,010百万ドル、予想:▲$4,327百万ドル）もありドル/ウォンは底堅く推移した。週明けの5日のドル/ウォンは1,297.0でオープンすると前日に上海でのコロナ検査の一部撤廃が発表されていたことから、人民元高が進行する一方で、ドル/ウォンも合わせて上値の重い展開となった。しかし海外時間に良好な米経済指標等を背景に米金利が反発すると6日のドル/ウォンは一転して上昇。7日には月高値1,325.8まで上昇した。その後市場で期待のあった中国のゼロコロナ政策緩和が想定の範囲内だったことによる失望売りが入り、13日にかけてドル/ウォンは特段の材料なく伸び悩む結果となった。13日海外時間に発表された米11月消費者物価指数（CPI）は市場予想以上のインフレ鈍化を示す結果となり、市場全体でドル売り地合いとなる中、14日のドル/ウォンは1,292.0ウォンまで下落した。15日は前日のFOMCで市場の予想通り+50bpの利上げとなったものの、声明文ではFRBによるタカ派的な姿勢が示され、景気後退への警戒感が広がりドル買いが強まったことでドル/ウォンは再度反発するも、ドル/ウォンはここが最後の本格的な上昇局面となった。週明け20日には日銀が10年国債利回りの変動幅を±0.50%（変更前±0.25%）を柔軟化すると、円金利が急上昇し日本10年国債利回りが0.5%の上限に到達する中、円主導でのドル売りに押されドル/ウォン1,273.0まで下落。その後は、年末にかけて徐々に流動性が薄くなってくる中、ドル/ウォンは実需のウォン買いに押され下落。加えて中国による入国者隔離措置の緩和報道も、アジア株買いとなり、こちらもウォン買い材料となった模様。結局、前月末比54.3ウォン安の1,264.5ウォンにてクローズ。

■ 今月の見通し

1月のドル/ウォンは若干の続落を予想する。

1月のドル/ウォンに影響する主な材料は以下の2点。
①インフレ推移とFRBによる金融政策②BOKによる金融政策

①米10月CPIをきっかけとしたインフレ緩和期待による米長期金利の低下は、ドル/ウォンを含めたドルロングポジションの解消を引き起こしている。足許のその他のインフレ指標や、雇用・住宅指標を見ても近い将来インフレ率がさらに低下することが期待されており、市場は先回りしてドル売りを行った印象だ。12月FOMCではFOMC参加者による米政策金利が発表され、9月時点よりも政策金利見通しは引き上がったものの、市場はインフレの鈍化に注目しており、反応薄な印象だ。

②11月24日にBOKは利上げ（3.00%→3.25%）を実施。BOK総裁からは物価見通しについて来年初めまでは5%台を維持するものの、徐々に鈍化して通年では3.6%程度を予想するとともに、景気についても2023年下期に回復基調をたどる見込みとし、全体的に利上げ終了を意識させる内容となった。12月には日銀による実質的な利上げの影響もあり、市場全体でドル売りとなる中、懸案だったウォン安は節目の1,300を割り込んでいる。BOKとしては通貨防衛を目的とした政策金利引き上げのインセンティブには乏しく、こちらをきっかけとしたウォン買い圧力は限定的となろう。

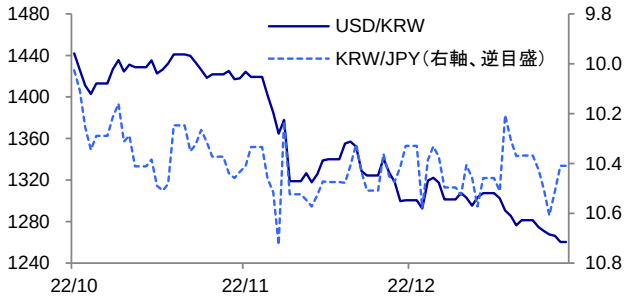
以上の通り、米政策金利を期待したドル買い相場が終わりつつある一方で、2023年の市場を牽引する材料が出てきていない印象だ。ただし、年明けからは日銀次期総裁への期待感等あり、日銀の金融緩和が終了するとの見方が広がりやすい。かかる状況下、間接的なドル売りに支えられどちらかといえばドル/ウォンも下落しやすいだろう。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地のワールドカップ事情』
現地でのWカップ事情ですが、韓国もアジア代表として出場に大いに盛り上がりました。10月末での梨泰院の事故以来韓国では若者が集まる集会は自粛が続いていたため、Wカップに関してもパブリックビューイングの開設が危ぶまれていましたが、Wカップで活躍するアジアの虎を応援しようと、光化門広場というところでは野外のパブリックビューイングが設置され、大いに応援が盛り上がる状況となりました。グループリーグでは最後のポルトガル戦でソンフンミンがゴールをアシストし逆転勝利に導き、ベスト16に出場。続く、ブラジル戦では王者の圧巻のパフォーマンスの前に敗れましたが、私の周りにいるほとんどの韓国人はブラジルと戦えたこと（グループリーグを突破できたこと）を素直に喜んでおりました。もし、韓国がブラジルに勝ち、日本がクロアチアに勝てていれば、ベスト4をかけ日韓戦が行われるところでしたが、それはもう少し両国が力をつけてからでしょうか。
2023年末には早くも次回Wカップの予選がスタートします。次回からはアジアの出場枠も増えているので大丈夫かとは思いますが、両国が出場権をつかむことを切に祈っております。

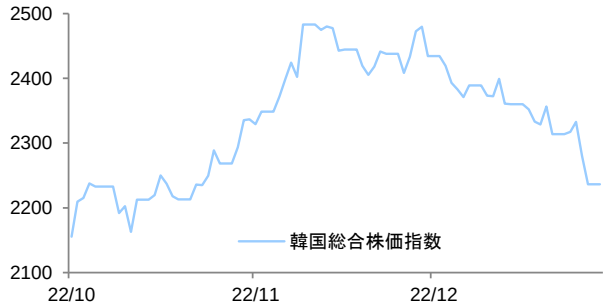
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	貿易収支	11月	-4327M	-7010M	-6724M
12/1	輸出(前年比)	11月	-11.2%	-14.0%	-5.8%
12/1	輸入(前年比)	11月	0.5%	2.7%	9.9%
12/1	GDP(前年比)	3Q	3.1%	3.1%	3.1%
12/2	CPI	11月	5.2%	5.0%	5.7%
12/14	失業率	11月	2.9%	2.9%	2.8%
12/23	PPI	11月	-	6.3%	7.3%
12/27	消費者信頼感	12月		89.9	86.5
12/30	鉱工業生産(前年比)	11月	-4.9%	-3.7%	-1.2%

台湾ドル相場

予想レンジ:

USD/TWD	30.20	～	31.20
TWD/JPY	4.25	～	4.45

東アジア資金部台北室　柴田　裕央

■ 先月の為替相場

12月のドル/台湾ドルはレンジで推移

月初12月1日は30.820でオープン後、パウエルFRB議長が講演で12月にも利上げが減速する可能性を示唆したことを受け、台湾株の上昇と共に外資が流入し、台湾ドル高の流れとなると、輸出企業も急いでドルを売ったため、30.6台まで下落。また、12月5日には中国のコロナ防疫措置の緩和の報道を受け人民元高の流れを受けてドル/台湾ドルも一時30.439まで下落。しかし、米11月ISM非製造業景気指数が予想を上回り、サービス業からの米国のインフレは当分落ち着かないとの見方が強まり、ドル買いが優勢となった。12月6日には30.6台まで戻し、その後は翌週に米国の11月消費者物価指数（CPI）、FOMCを控えていることから、30.70ちょうどを挟んでレンジでの推移が続いた。

月央に入ってもレンジでの推移が続いたが、米11月CPIが発表されると予想以上に伸びが鈍化したことから米金利低下・米株高・米ドル安の流れとなり、これを受けて台湾株が反発し、台湾ドル買いが優勢となり、30.5台まで下落。しかし、その後は中国の経済指標の悪化、米11月小売売上高が予想を下回ったこと等から台湾株が売られると30.7台まで戻した。

月後半に入っても台湾株が軟調に推移すると30.7台で推移。ただし、上値では輸出企業のドル売りが入ってくるため、上値は重く推移。その後はクリスマス休暇前で外国人投資家の参加者が少なくなる中、貿易実需の取引が中心となり、レンジでの推移が続いた。しかし、クリスマス休暇明けには米長期金利が上昇したことを受けて米ハイテク株が軟調に推移すると、台湾株安・台湾ドル安の流れとなり、一時30.778まで上昇した。

■ 今月の見通し

1月のドル/台湾ドルは春節を挟むため、前半は輸出企業の台湾ドル買いが優勢となるであろう。

12月についてはイベントも多く、ドル/円は大きく動いたものの、ドル/台湾ドルについては、比較的落ち着いた相場であった。ただし、2022年で振り返ってみると、1997年のアジア通貨危機以来の値幅が大きい年であった。最大の要因は米国の金融引き締めであり、それに伴う景気後退懸念による台湾株安である。景気後退への懸念については、実際に輸出に表れており、2年以上伸びが続いてきた輸出は3か月連続で前年同月比マイナスとなっている。11月の輸出受注をみると前年同月比▲23.4%と大きくマイナスとなっており、今後も輸出が減少すると見込まれる。

なお、12月の台湾中銀は、4会合連続で利上げを決定した一方、2会合連続で引き上げを行ってきた預金準備率は据え置き、金融引き締めとしては、スピードを緩めてた形に。楊台湾中銀総裁も記者会見ではCPIが+2%より低くなれば、利上げも停止も想定と述べており、景気後退が警戒される中、台湾の金融引き締めの出口は見え始めている。

1月については、後半に春節があるため、春節前に輸出企業のドル売りが集中しやすく、1月前半は台湾ドル高となりやすいと見込む。しかし、米国の物価動向、利上げについては不透明感もあり、一喜一憂しながらのレンジでの推移となるであろう。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

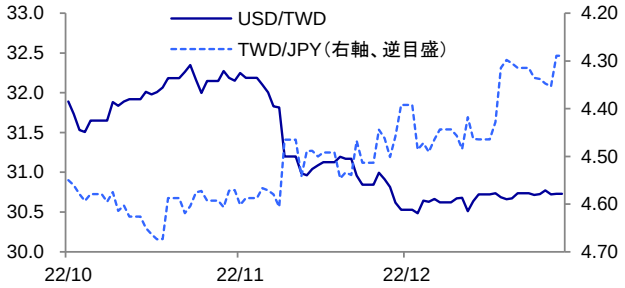
『当地のワールドカップ事情』

当地ではスポーツというと、野球やバスケットボールが人気で、サッカーはちゃんとしたプロリーグもなく、あまり盛んではありません。FIFAのランキングでも2022年12月現在、157位とまだまだワールドカップからは遠いところにいます。

しかし、サッカーのワールドカップについては、観戦する人も多く、スポーツバーで見ている人(外国人も多いのですが)もいます。また、ワールドカップ開催期間中は街中でグッズを売っているのを見かけました。日本代表戦を観戦している人も多く、日本が勝利をした翌日の朝一に、当地のスタッフから「おめでと～」と声を掛けてくれるくらいです。（誕生日じゃないし、何がおめでたいのか、一瞬分かりませんでしたが、、、）

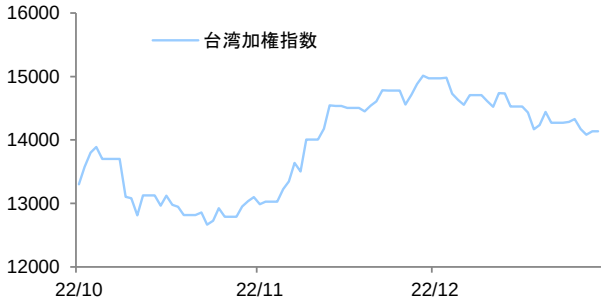
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/5	外貨準備高	11月	-	552.20B	542.79B
12/6	CPI（前年比）	11月	2.50%	2.35%	2.74%
12/7	輸出（前年比）	11月	-6.8%	-13.1%	-0.5%
12/7	輸入（前年比）	11月	-0.4%	-8.6%	8.2%
12/7	貿易収支	11月	3.00B	3.43B	2.99B
12/15	公定歩合	4Q	1.750%	1.750%	1.625%
12/20	輸出受注（前年比）	11月	-12.8%	-23.4%	-6.3%
12/22	失業率	11月	3.65%	3.64%	3.64%
12/23	鉱工業生産（前年比）	11月	-5.30%	-4.93%	-4.27%

香港ドル相場

予想レンジ:

USD/HKD	7.7800	～	7.8200
HKD/JPY	16.60	～	17.80

東アジア資金部　Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【12月の香港ドル直物相場】
中国はゼロコロナ政策を転換し、各種規制を急速に緩和し始めている。これを受けて香港上場の中国関連株への投資意欲が回復し、活発化した外貨流入が押し上げ圧力となり、12月の香港ドル直物相場は、一時は2021年6月以来の高水準となる7.76台前半まで上昇した。しかし、FRBが+50bpの追加利上げを実施したことで米ドル高圧力が強まると、ペッグ制の取引レンジ中心である7.80近辺まで再び値を戻した。海外からの資金流入が堅調となった一方で、中国本土からの資金流入は限定的となった。年初来のストックコネクト(中国本土市場との株式相互取引制度)による資金流入額は約3,800億香港ドル程度に留まり、2020年、2021年の累積流入額を下回る水準となっている。マクロ経済に目を向けると、香港と中国本土間の早期往来再開への期待が高まっており、実現すれば香港経済の一段の回復が見込まれる。中国本土からの観光客が戻ることで、香港域内の消費活動も活発化することが期待できるだろう。一方で、未だに外需の回復が鈍い中、貿易活動は低迷が続くと予想されている。

【12月の香港ドル金利市場】
高止まりしていた香港ドル短期金利は12月下旬に低下し始めた。これは、一部の銀行が年末の資金確保の為に保持していた香港ドル余剰資金を、流動性の薄い年末の短期金融市場で放出し始めたことが主な要因と考えられる。季節性の需給逼迫が緩和され、米ドルと香港ドルの短期金利差が縮小した。香港ドルHIBORと米ドルLIBORの金利差(香港ドルHIBOR-米ドルLIBOR)は、1か月物が86bpあった金利差が全て巻き戻され、3か月物は68bpから20bp近くまで縮小した。12月はHKMAによる香港ドル買い介入も無く、アグリゲートバランスは960億香港ドル近辺でほぼ横ばいだった。一方、中期以降の金利は方向感無く上下する展開が続いている。金利低下要因となる米国の景気後退リスクや、金利上昇要因となる中国のコロナ規制撤廃に伴う一段のインフレ圧力等、不透明な相場材料が意識され、市場参加者は来年のFRBの利上げサイクルについて思考を巡らせている様子だ。現在香港ドルスワップ金利3年物は4%を超えるレンジで推移している。いずれにせよ、市場参加者はFRBが今後数年で利下げサイクルに転じるとの見方を維持しており、香港ドルの長短金利差(3か月物HIBOR-3年物スワップ金利)は一段と拡大した。

■ 今月の見通し

【1月の香港ドル直物相場】
FRBの利上げサイクルがまだ続くとみられる中、米ドル買い/香港ドル売りキャリートレードの取引機会が復活してくるだろう。同トレードポジションのリターン水準を測る上で重要な指標である香港ドルT/Nフォワードポイントは、再びマイナス圏に突入している。2023年の上半期においても、FRBはインフレ抑制を第一優先に利上げサイクルを延長していくとみられ、米ドルの上昇圧力を受けて香港ドル直物相場もペッグ制の中心値である7.80より香港ドル安水準で推移すると想定している。しかし、米ドル金利が上昇すれば追随して香港ドル金利も上昇する為、ペッグ制の下限である7.85まで香港ドル安が進む可能性は低いだろう。また、2023年下半期にはFRBが利上げサイクルの休止を検討する可能性があり、見通しがより具体的になるにつれ、米ドル売りを伴って香港ドルも反対に7.80を超えて香港ドル高方向に進むことも想定される。加えて、中国が今後もコロナ政策からの脱却を進めていけば、関係の深い香港経済の回復と投資資金の流入が期待でき、これらも香港ドル高圧力に繋がると想定される。

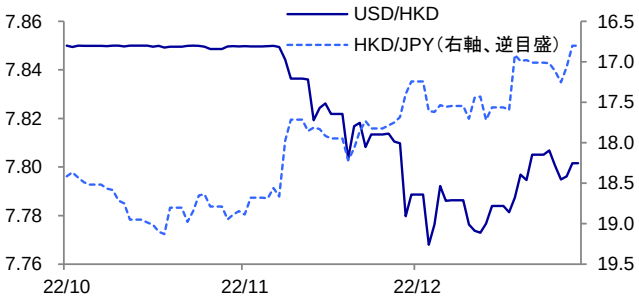
【1月の香港ドル金利市場】
香港ドルの短期金利は、年末の季節性要因が剥がれていくことで低下する可能性が高い。香港ドルHIBOR3か月物は長期的にはFF金利誘導目標に連動すると考えられている。しかし、現状の米国のFF金利誘導目標の上限が4.50%であるのに対し、香港ドルHIBOR3か月物は5%近辺を推移しており、まだ低下余地がある。一方で、HKMAのアグリゲートバランスは安定的に推移していることから、香港ドル需要逼迫要因による短期金利上昇圧力は限定的となるだろう。また、米国の景気後退観測に伴いFRBの利下げ転換がより現実的となった場合、米金利の低下観測に伴って、香港ドル短期金利も低下圧力がかかることが予想される。現在の香港ドルスワップ金利は、こうした米国の景気後退リスクが意識される中で低下圧力がかかっており、今後も上値の重い展開が続くものと見ている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地のワールドカップ事情』
香港でも、ワールドカップの観戦は白熱しました。2022年のカタールワールドカップには中国や香港のチームは参加しませんでしたが、その分香港の人々は日本や韓国等同じアジア地域のチームや、イングランドチームの応援に力を入れていました。残念ながらこれらのチームは準決勝前に敗退してしまいましたが、深夜の時間帯の試合でも多くの人が起きて、自宅やスポーツバー、ショッピングモールのパブリックビューイング等で試合を観戦していました。新型コロナウイルスの影響もあり、自宅観戦を選択する人が多かったのですが全ての試合を自宅で観るには、テレビやタブレット等の端末でワールドカップパスを購入する必要がありました。無料で観られる試合は限られていたので、次回は全試合が手軽に観戦できるようになればいいなと思っています。

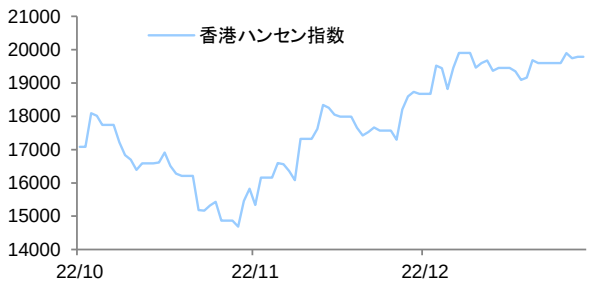
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	小売売上高(価額/前年比)	10月	-2.1%	3.9%	0.3%
12/5	S&P Global Hong Kong PMI	11月	-	48.7	49.3
12/7	外貨準備高	11月	-	$423.2b	$417.2b
12/13	鉱工業生産(前年比)	3Q	-	-0.6%	2.7%
12/13	PPI(前年比)	3Q	-	0.4%	0.8%
12/16	失業率(季調済)	11月	3.7%	3.7%	3.8%
12/20	CPIコンポジット(前年比)	11月	1.9%	1.8%	1.8%
12/29	輸出(前年比)	11月	-16.2%	-24.1%	-10.4%
12/29	輸入(前年比)	11月	-13.8%	-20.3%	-11.9%
12/29	貿易収支(HKD)	11月	-25.0b	-27.1b	-$20.9b

中国人民元相場

予想レンジ:

USD/CNY	6.8200	～	7.0500
CNY/JPY	18.15	～	19.95
100JPY/CNY	5.0000	～	5.5000

みずほ銀行（中国）有限公司　中国為替資金部　竹本　寛

■ 先月の為替相場

12月のドル人民元（USD/CNY）は7.0割れ後、方向感に欠ける推移となった。

11月末にかけて、不動産セクター支援強化策等を受けた中国株の反発上昇や複数地域における防疫措置の一部緩和の発表を受けて元買い優勢となり、7.20台からの下落を見せていたUSD/CNYは、12月5日には節目の7.0を割り込んだ。米金利低下も相まって同日日中には9月以来の水準となる6.94台半ばまで下落した。その後は6.95～98台を中心とした方向感のない推移が継続。

13日、注目されていた米11月消費者物指数（CPI）が減速を示し、インフレ鈍化への思惑に米金利低下、ドル安となって一時6.94近辺へ急落。翌日のFOMCでは政策決定内容、声明文、パウエルFRB議長会見ともに大きなサプライズはなく、大きく方向感を変えるに至らず6.96～99台での推移を継続させた。

下旬には、中国入境時の防疫措置緩和や中国本土国民に対するパスポート発給再開などの発表が続き、6.95付近まで軟化する場面も見られたが、年末の閑散相場の中で値幅は限定的となっている。

■ 今月の見通し

1月のUSD/CNYは上値の重い推移を予想する。

米CPIにも鈍化の動きが確認される中、FRBの性急な利上げ局面もピークアウトを迎え、ドル高一辺倒の動きは11月以降に収束を迎えている。12月のパウエル議長会見においては、足元のインフレ鈍化を確認しつつも、物価の上振れリスクについて言及しており、今後の経済指標（CPIや個人消費支出デフレーター等）によってはドル高が一時的に再燃する可能性には警戒しておきたいが、メインシナリオになるとは考えにくい。

他方、中国サイドではこれまで実施してきた強固な「ゼロコロナ政策」からの転換をスピード感をもって進められている。2019年12月に武漢から始まった感染拡大前から中国に駐在している身からすれば、ここ数週間の公共施設に入る際や省を跨ぐ移動時におけるPCR陰性確認が不要となったことは実生活において相当なインパクトがあると感じられる。しかしながら、12月末現在においては、制度的に緩和措置が進む一方で実態としては陽性者が増加したこともあって、経済活動が本格始動したとは言えない状況となっている。経済指標で確認できる消費や工業生産、不動産セクター等の状況が好転するには相応の時間を要するものと想定される。

中長期的には、感染拡大終息と当局の積極的な景気支援策に対する思惑が人民元高に寄与すると想定するが、経済データにおける底打ちと回復の兆し、それに伴う人民元金利上昇の兆候が確認されるまでは、もう一段のUSD/CNYの下落に対しては力不足と考えられる。1月のUSD/CNYは12月同様に上値の重さを確認しながら方向感を探る展開を予想する。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地のワールドカップ事情』

中国は残念ながら今回のワールドカップには出場できていませんが、上海に住んでいる感覚ではこの”お祭り”に乗じている「にわか」ファンが相当数いると、感じられました。

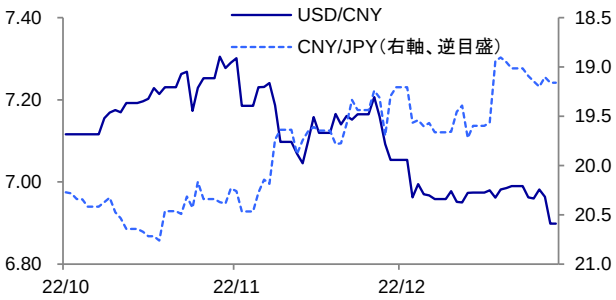
中国のWechat、Weibo、Tiktok（中国では抖音という名前）では、ワールドカップ期間中にはサッカーの話題で埋め尽くされていました。私もスポーツバーに試合を観戦に行きました。通常は発生しないまぁまぁの入場料を取っていましたが、それでもテーブル席は予約で満席の状態で、深夜でも立ち見客が多数いるような状況でした。

中国は街中に多数のバスケットコートがあり、プレーしている人も多い大人気スポーツです。バスケ好きな私にとってはとてもいい環境です。一方、サッカーコートやフットサルコートはあまりない印象です。それでも、これだけたくさんの人が熱狂するということは、ワールドカップはものすごい影響力を持っているという事なのでしょう。

ちなみに愛知県出身の私は、小学生の時にストイコビッチ選手が名古屋グランパスで現役の時にスタジアムに試合を見に行って以降、サッカーはほとんど見ておりません。従って、私も完全に「にわか」なのですが、それでも熱狂の渦に巻き込んでしまうワールドカップの力はスゴイですね！

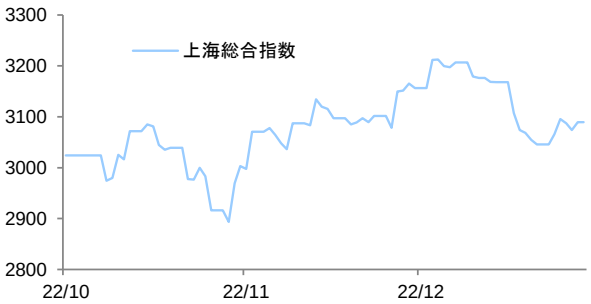
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	財新・製造業PMI	11月	48.9	49.4	49.2
12/5	財新・非製造業PMI	11月	48.0	46.7	48.4
12/7	貿易収支	11月	$78.05b	$69.84b	$85.27b
12/9	PPI(前年比)	11月	-1.5%	-1.3%	-1.3%
12/9	CPI(前年比)	11月	1.6%	1.6%	2.1%
12/15	小売売上高(前年比)	11月	-4.0%	-5.9%	-0.5%
12/15	工業生産(前年比)	11月	3.5%	2.2%	5.0%
12/15	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	11月	5.6%	5.3%	5.8%
12/20	LPR1年物	-	3.65%	3.65%	3.65%
12/20	LPR5年物	-	4.30%	4.30%	4.30%

シンガポールドル相場

予想レンジ:

USD/SGD	1.3300	～	1.4000
SGD/JPY	91.50	～	102.30

アジア・オセアニア資金部　成田 隼基

■ 先月の為替相場

2022年12月のUSD/SGD相場はSGD高が進行。

月初よりSGDは堅調推移。米11月ISM製造業景気指数の下振れを受けて米金利が低下したことが背景。アジア通貨は全般強含みに推移する中、USD/SGDは1.34台半ばの水準まで下落。しかしその後5日に発表された米11月ISM非製造業景気指数が強い結果となると、米金利は反転上昇。ドル高が進行する中、USD/SGDは1.36台まで上昇した。

その後のUSD/SGDは狭いレンジ内推移が継続。7日、中国でゼロコロナ政策の緩和が発表されるも、事前報道通りであったこともあり、市場の反応は限定的。その後も米11月生産者物価指数が発表され、市場予想を上回る強い結果が示されたが、FOMCを控え動意薄の展開が続いた。

13日、発表された米11月消費者物価指数はコアも含めて市場予想を下回り、FOMCを控え警戒感が後退。米金利低下と共にドル安が進行し、USD/SGDは再び1.34台半ばの水準まで下落。14日、注目のFOMCについてはほぼ市場予想通りの結果。発表直後にﾄﾞﾙが上下するも一時的な値動きにとどまった。

その後15日のアジア時間は、大半のアジア通貨が値を下げた。中国の11月主要経済指標の下振れや感染者急増が重しとなった。特にKRWやTHBが売られる中、USD/SGDは1.35台後半の水準まで下落。16日もSGDは小幅続落。欧米中銀のタカ派姿勢堅持を手掛かりにリスク警戒感がくすぶる中、アジア通貨は軟調。USD/SGDは1.36台前半の水準まで上昇する展開。

その後のSGDは月末にかけて堅調推移。19日、前週に開催された中国の中央経済工作会議にてゼロコロナ政策の合理化の他、不動産市場への追加支援が示唆されたことがアジア通貨の支援となった。また、欧米株が堅調推移となる中、USD/SGDは水準を下げ、27日にかけて1.34台半ばまで値を下げた。

月末にかけてはゼロコロナ緩和のヘッドラインを受けSGDは堅調推移。アジア通貨は全般堅調推移となり、USD/SGDは1.34台前半の水準で越月となった

■ 今月の見通し

2023年1月のUSD/SGD相場はSGD高の進行を予想。

2022年のSGDを振り返ると、アジオセ周辺地域の通貨で比較した場合、通年の対ドルにおける値動きで唯一上昇した通貨となった。

通年の値動きをとしては、まず2022年初頭より10月中旬にかけてUSD/SGDはじりじりと上昇。米利上げ継続に伴うUSD高圧力に圧された格好。年初1.35台前半で推移していたUSD/SGDは10月の中旬にかけて1.43台後半の水準まで上昇した。

しかし、2022年10月のMAS会合以降については、SGDは毎月途切れることなく上昇を続け、下落幅を埋める展開。最終的にUSD/SGDは1.34台前半の水準で12月を越月しており、2022年内の下落幅を全て取り戻した格好となった。

これについては、MASが臨時会合を開くまでしてフレキシブルに金融政策の変更を発表してきたことが要因の一つと分析出来るものの、主因ではないと考えている。主因はやはり米国発の材料であり、ここまでのSGD高急転は、USD安進行により引き起こされた偶然の事象であると分析している。

米国のインフレ指標が減退傾向を示す中、米金利が低下しUSD安が進行するといった値動きが昨年末にかけて顕著に見られたトレンドであり、これに加え、アジオセ地域周辺国対比で比較的先行して金融引き締めを行っていたSGDにスポットライトが当たった格好なのだろう。

現状、SGDは対USDでは大きく上昇も、NEER通貨バンド内でのSGD上昇は穏やかであり、余裕がある。SGDの金融政策には弾力性があり、日銀方針転換への期待感からUSD安地合いが継続していることも踏まえ、今月のSGDについては引き続き堅調推移を予想する。リスク要因としては、中国の旅行規制緩和に伴うCOVID感染者の急増や2023年下半期にかけての全世界的な景気後退局面入りといった事象。こうした局面では再度USDが優位となることが予想されるため、足元の状況を楽観せず引き続き動向を注視したい。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

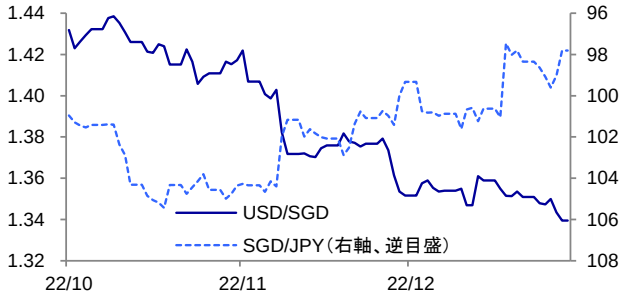
『当地のワールドカップ事情』

今回のW杯、日本の大活躍により眠れない日々が続いてしましましたが、当地シンガポールでも日本の活躍は注目されていました。日本が緒戦でドイツに勝利した際には、チームのメンバーから「おめでとう」とメッセージをもらいましたし、クロアチア戦後には残念だったねと声を掛けられました。
驚いたのはクロアチア戦当日に乗ったタクシーのドライバーからも、「日本人か？」と聞かれ「そうだ」と答えると「今夜はクロアチア戦だな」と声をかけられたこと。同じアジアの国として日本の躍進はシンガポールの方から見ても誇らしいものがあったのか、「日本はすごい」、「応援している」と暖かい言葉を頂きました。
歴史的に日本とシンガポールの間には悲惨な出来事が有ったにも関わらず、日本が応援してもらえるということに胸をうたれ、図らずもタクシーの中でウルっときてしまったのはここだけの話。
話がそれましたが、シンガポールの島内ではサッカー中継を流しているところも多かったようで、深夜にもかかわらず多くの人が集まり、一喜一憂していたとのこと。特にバーなどでは大いに盛り上がったようですが、それ以外でも調べてみると公共施設でも無料のパブリックビューイングが催されていたようですし、某大手ハンバーガーチェーンでも放送していた様で、夜の街に出歩かない私はあまり気がつきませんでしたがいたるところで注目されていたようでした。
シンガポールのナショナルチームはというと、アジア2次予選敗退。過去、W杯本戦への出場を果たしたことはないので、是非4年後の北米W杯では、日本同様にシンガポールも応援できる様、予選突破を祈るばかりです。

（アジア・オセアニア資金部　綱島）

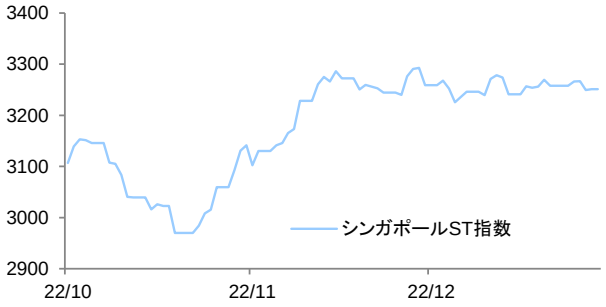
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/2	購買部景気指数	11月	49.5	49.8	49.7
12/5	小売売上高(前年比)	10月	10.4%	10.4%	11.3%
12/16	非石油輸出(前年比)	11月	-6.5%	-14.6%	-6.1%
12/23	CPI(前年比)	11月	6.5%	6.7%	6.7%
12/23	鉱工業生産	11月	-1.5%	-1.2%	0.6%

タイバーツ相場

予想レンジ:

USD/THB	33.30	～	35.20
THB/JPY	3.74	～	3.90

アジア・オセアニア資金部 バンコック室　末廣　絢太

■ 先月の為替相場

12月のドル/バーツは前月からの下落は一服するも、上値も限定的な推移となった。35バーツ台前半で取引を開始し、バンコク時間1日早朝のパウエルFRB議長の講演にて利上げペースの減速が示唆されたことを受け、ドル売り優勢地合いとなる中、ドルバーツも早々に35バーツを割り込む展開に。中国のコロナ規制緩和もドル売りを後押しする格好となり、バンコク時間5日正午頃には34バーツ台半ば付近まで下落。以降、予想比上振れた米11月ISM非製造業景気指数を受けて上昇に転じ、13日の予想を下回る米11月消費者物価指数を受けて下落する等、15日（バンコク時間早朝）のFOMC結果公表までは主に米国経済指標の結果に一喜一憂する展開となった。

注目されたFOMCでは市場予想通り+50bpの利上げが決定され、利上げペースは減速することとなったものの、同時に公表されたドットチャートにおいて、2023年末時点における金利予測中央値が前回の4.625%から5.125%へと予想以上に引き上げられたことを受け、ドル/バーツは上昇。ただし、35バーツ台前半で上昇は一服し、その後は軟調な米経済指標等を受けて上値の重さが意識される展開に。20日には日銀がイールドカーブ・コントロールの許容変動幅を拡大させる決定をしたことがサプライズとなり、ドル/円の急落とともにドルバーツも34バーツ台半ば付近まで下落した。

下旬はクリスマス・年末ムードの中、動意の乏しい推移が継続。中国のコロナ規制緩和が進む状況下、同国内における感染拡大がアジア地域への経済に与える影響が懸念され、他のアジア通貨と同様にバーツもドルに対し軟調な推移を見せる場面もあったものの、月末にかけては流動性も薄くなる中、34バーツ後半から半ばにかけての推移となり、そのまま同水準にて2022年最終日の取引を終えた。

■ 今月の見通し

1月のバーツはリスクを内包しながらも、観光業の回復期待を反映しながら堅調な推移を予想。

中国では1月8日より海外から中国本土に入る際に義務付けられている合計8日間の強制隔離が撤廃され、ゼロコロナ政策が事実上、終了することになる。それに伴い、中国国外への旅行も解禁されることになり、中国からタイへの旅行者増加に期待が高まっている。コロナ前、2019年にタイを訪れた中国人観光客はおよそ1,100万人であり、全体（約3,990万人）のおよそ3割を占め、観光収入も約171億ドルと、こちらも全体の約3割に相当し、他国を圧倒するものとなっていた。今年の中国の春節は1月22日であり、それに伴う大型連休に合わせ、中国からの観光客の戻りが順調なタイ観光業の回復を後押しすることが期待される。

ただし、同時に懸念すべき材料も存在する。まず、中国ではコロナウイルス感染が拡大している中での規制撤廃であり、中国人観光客が増加することで、タイ国内での感染再拡大が危惧される。タイ公衆衛生局では中国人観光客の受け入れに際し、他国からの観光客と同様に入国時の検査等を行わないことを決定しており、感染再拡大の懸念を助長する格好となっている。加えて、中国国内の景気低迷の影響等により、海外旅行を控えることで、中国からの観光客が想定以上に増加しないという見方も一部では台頭している。まずは規制撤廃後の中国人観光客の戻りの状況や、その後のタイ国内での感染再拡大の状況を見極めることとなりそうだ。

また、その他バーツ安材料として、需給面におけるリスクも警戒しておきたいところ。12月27日にタイ商務省により発表された11月貿易統計によれば、世界的な景気低迷や、中国のロックダウンを反映する格好で、輸出は2か月連続で落ち込む結果となった。

タイの観光業にとっては待望の中国の規制緩和であり、中国人観光客が戻ってきたという事実はバーツ相場をサポートする材料になろう。ただ、その一方で、バーツ安をもたらすリスクにも注意を払っておきたい。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地のワールドカップ事情』

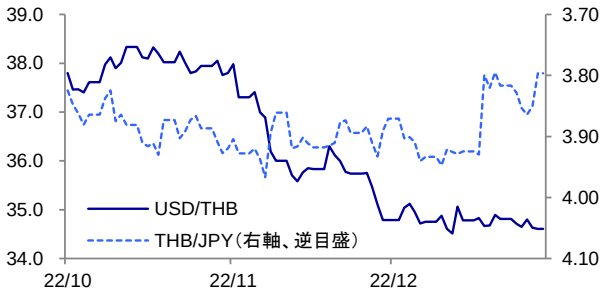
当地においてサッカーは非常に人気の高いスポーツとなっているようです。当地スタッフに話を聞いてみると、普段の穏やかな雰囲気からは激しいスポーツを好んで見ている姿はあまり想像できないですが、多くの人がサッカー好きとのこと。

残念ながら、タイ代表がこれまでにワールドカップの本戦に出場したことはないようですが、スタッフの話によれば、タイではイングランドプレミアリーグの人気が非常に高いようで、その影響からイングランド代表を応援している人が多いのでは、とのこと。実際、昨年7月にバンコクで行われたマンチェスターユナイテッドとリバプールのプレシーズンマッチにおけるタイ現地ファンの熱狂ぶりは凄まじかったようです。

また、昨年の日本代表の快進撃はタイの人々にとっても印象的だったようで、当地タイスタッフと話をしていると日本代表の話題になることが多くありました。どちらかというと野球派でサッカーについて無知な私は、彼らの話に全くついていけませんでしたが、熱心に話をする様子を見ていると、本当にサッカーが好きなんだなと感じました。（ちなみにタイでは野球の認知度・人気は極めて低いです）

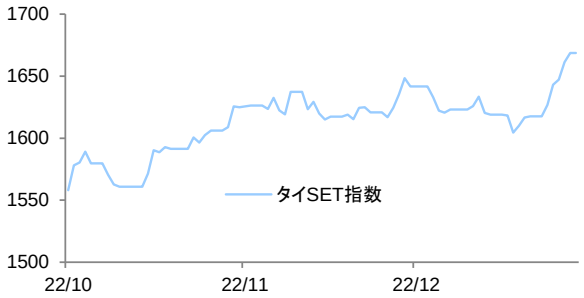
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/7	CPI YoY	11月	5.80%	5.55%	5.98%
12/7	CPI コア YoY	11月	3.20%	3.22%	3.17%
12/8	消費者信頼感指数	11月	-	42.0	40.0
12/20	自動車販売台数	11月	-	68,284	64,618
12/27	輸出(通関ベース)YoY	11月	-5.65%	-6.00%	-4.41%
12/27	輸入(通関ベース)YoY	11月	-1.50%	5.60%	-2.07%
12/27	貿易収支(通関ベース)	11月	-$143M	-$1,340M	-$596M

マレーシアリンギ相場

予想レンジ：

USD/MYR	4.38	～	4.48
MYR/JPY	29.85	～	30.77
JPY/MYR	3.25	～	3.35

マレーシアみずほ銀行　内田 塁

■ 先月の為替相場

先月のリンギット相場は動意に乏しく月全体を通して、USD/MYRは4.40近辺で揉み合い推移となった。

月初4.40近辺でスタートしたUSD/MYRはややMYR高に振れた。1日にFRBがインフレ指標として重要視する10月個人消費支出（PCE）コアデフレーターが発表。物価落ち着きの兆しが確認され、今後のインフレ期待を押さえる内容。5日発表の米11月ISM非製造業景気指数では予想外の強さを見せると逆に金利上昇で反応しドル買いでUSD/MYRは一時4.41を付けたが上昇は続かず。中国政府によるゼロコロナ政策の一部緩和発表を材料に人民元買いでUSD/MYRは4.40割れ水準までややMYR買戻しが入ったが、15日FOMCを前にブラックアウトでFRB高官の発言が控えられる中、総じて膠着感の強い値動きとなった。

中旬は米11月消費者物価指数（CPI）発表、主要中銀の政策金利が市場の注目となった。CPIが市場予想を下回るとドル売りとなり一時4.39割れ水準まで下落。その後の注目されたFOMCでは利上げ終了時期がまだ先であることを印象付けるタカ派的なトーン。金融当局としてある程度の景気冷え込みを覚悟してもインフレ撲滅に注力する姿勢を改めて示した格好だが、市場反応は限定的。翌日のECB、BOEも既に景気後退入りが濃厚な状況下で共に+50bpの利上げを決定。USD/MYRは主要イベントを消化してUSD/MYR4.42近辺で推移した。

下旬は年末で市場参加が減る中、市場は閑散となり動意に乏しい展開。19日にアンワル首相が連邦議会で発声方式による信任を受けたことで、一部野党からの批判を受けながらも国内政治安定化への期待が高まった。また、日銀会合におけるイールドカーブ・コントロール政策の許容変動幅拡大を受けてドル/円が130円まで急落すると新興国通貨が堅調に推移する中、4.43で底堅く推移し、MYR/JPYは円急騰で30円割れとなった。23日に発表された11月CPIでは市場予想を若干上回る前年比+4.0%。レストランやホテルなどサービス価格の上昇がインフレ率を押し上げ、来年1月19日に控える政策会合での利上げ余地を残す結果として捉えられた。2022年を振り返ると、年初4.2台でスタートしたUSD/MYRは、ドル利上げによるドル上昇の流れで4.75というアジア通貨危以来の水準まで上昇するなど値幅を伴って上下方向に動き、年初比約2000pipsMYR安の水準でクローズとなった。

■ 今月の見通し

2023年のリンギット相場は、世界的な景気減速へと突入する懸念が広がる中、昨年マレーシア経済を牽引してきた貿易統計が主力の電機・電子を中心に持続的な成長を続けられるか、そしてアンワル新首相による政権運営手腕に注目したい。

国内政局では、アンワル新首相が11月の総選挙で勝利し、政権交代を実現させた。アンワル首相は、財務大臣を兼任することで財政規律強化を真剣に取り組む姿勢を打ち出している。保証債務等を含めた広義の政府債務が対GDP比率で80%を超え、また財政赤字も対GDP比率で5%半ばとコロナ前の水準を2%程度上回る厳しい懐事情の中、財務大臣兼務の新首相による財政基盤強化策を期待する海外投資家の視線は注目される。既に補助金見直しや各種インフラプロジェクトの見直しに着手しており、抵抗勢力の反対を押さえて具体的な成果に結びつけることができれば、海外投資家によるマレーシアソブリンへの見直し買いに繋がると期待される。

国内経済に目を向けると、足許じり高で推移するコアインフレの動向に目を配りつつも、注目すべきは貿易統計だろう。マレーシア経済の主力エンジンである電機・電子を中心とした輸出に対する今後想定される世界景気後退リスクへの影響インパクトがどの程度になるか。直近9～11月データを参照すると数値全体としては尚堅調を維持しているが、個別に見れば中国や欧州向け輸出の伸び鈍化の兆しが確認される。コロナ禍で活況を呈してきた半導体市況に陰りが見え隠れする中、需給悪化による輸出の落ち込みに繋がれば国内経済への影響を回避するのは簡単ではないと見ている。

以上、2023年のリンギット相場を占う上で1月の走り出しには注目したい。23年の修正予算案は2～3月に提出されると見られることから、1月は各種経済指標を見ながらマレーシア経済の体温を確認しつつ、19日に予定されるBNM政策会合での利上げ有無に注目したい。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地のワールドカップ事情』

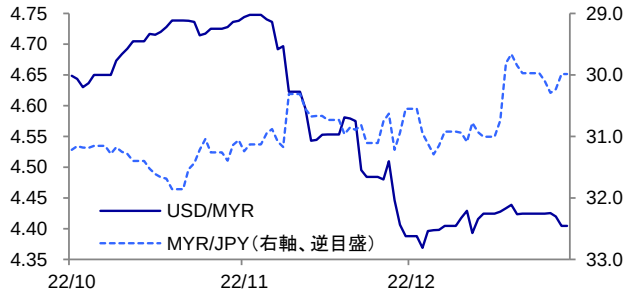
ワールドカップ出場経験のないマレーシアでサッカーと言えば、特に日本人にとっては1998年フランス大会のジョホールバルの歓喜の方が有名かもしれません。ちなみにジョホールバルは首都クアラルンプールから車で4-5時間程の位置です。98年当時は開発途上国の地方感満開の光景がテレビに映し出されていましたが、今ではマレーシア第二の大都市として目覚ましい発展を遂げています。その他にマレーシアでサッカーと言うと、昨年の11月末にKLシティFCがマレーシア杯で優勝したことで翌月3日が祝日になった出来事がありました。当地に赴任して初めての経験でしたので、当時は優勝して休日になるんだと随分驚いたのを覚えています。

プレーをする立場でのサッカーは国民的スポーツのバトミントンに叶わないものの、熱狂的なサッカーファンは比較的多いと感じています。当地資金課メンバーにも休暇を取ってスポーツバーに足を運んで深夜まで観戦する人もいました。そのメンバーの一人であるGくんは日本戦もきちんと押さえていて、日本戦があった日の朝の話題はやはりサッカー。ワールドカップがあることさえ直前まで認識していなかった小生は、初戦のドイツ戦に至っては、彼から試合内容を解説してもらう有様でした。その後、コスタリカ戦、スペイン戦、クロアチア戦と進むに連れて少しずつ挽回しましたが、深夜に開催される他国同士の闘いを観戦する彼には到底叶わない熱量です。

次回のワールドカップをもしこの地で観戦できたら、一度はスポーツバーで観戦して異国のサッカーファンと盛り上げりたいと思います。

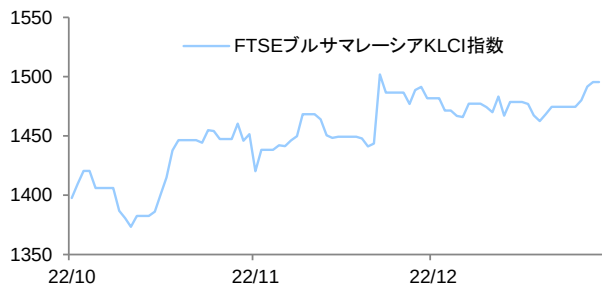
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/7	Foreign Reserves	Nov 30		$109.7b	$107.5b
12/12	Industrial Production	Oct	7.7%	4.6%	10.8%
12/19	Exports YoY	Nov	13.7%	15.6%	15.0%
12/19	Imports YoY	Nov	21.7%	15.6%	29.2%
12/19	Trade Balance MYR	Nov	15.60B	22.31B	18.09B
12/22	Foreign Reserves	Dec 15		$110.3b	$109.7b
12/23	CPI YoY	Nov	3.90%	4.00%	4.00%

インドネシアルピア相場

予想レンジ：

USD/IDR	15300	～	15700
IDR/JPY	0.813	～	0.870
JPY/IDR	114.94	～	123.00

（注）100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部　綱島　正侑記

■ 先月の為替相場

先月のルピアは行って来いとなり、結局は横ばいで推移。
月初ドルルピアは15600近辺で取引を開始。1日発表のインドネシア11月消費者物価指数（CPI）の結果は市場予想を下回る前年同月比+5.42%となり、前月に引続き低下が確認されたが、米利上げペース減速との思惑からドル売りが優勢となりルピアは2日にかけ15300台後半まで上昇。翌週5日には中国の行動規制緩和等の報道を受けアジア通貨高となる中、一時15300台半ばで続伸したが、その後はドル買い戻し優勢となり15400台半ばまで反落。海外時間に発表された米指標の良好な結果を受けドルが買われる展開となると翌6日ルピアは15600台前半まで下落幅を拡大。その後は翌週に控える米11月CPI発表やFOMCを控え15600近辺でもみ合い推移。13日、米11月CPIの結果が市場予想を下回ったことを受けドルが売られる中、翌14日のルピアは対ドルで15500台半ばまで上昇したが、同水準ではドル買い意欲も強くルピアは上昇幅を縮小させ15600台前半まで反落。14日、FOMCにおいて市場予想通り+50bpの利上げが決定された一方、FOMCメンバーによる2023年末時点の金利見通し中央値が5%を超える結果となりドルが買い戻される展開。翌15日、前日対比ルピア高となる15500台半ばで取引を開始したが、その後はドルが買い戻され15600台前半までルピア安が進展。この日発表されたインドネシア11月貿易収支は貿易黒字がUSD5.16Blnとなり市場予想を上回る結果となり、アジア時間引けにかけてはルピアが小幅に反発、15600近辺まで値を戻した。翌週20日には、日銀がサプライズでのイールドカーブ・コントロールの運営見直しを行ったことを受けドル売り・円買いが急速に進展、一時ルピアも対ドルで15500台後半まで上昇したが、その後米金利高を受けドルが買われルピアは15600台前半まで反落。22日に行われたインドネシア中銀政策決定会合では、+25bpの利上げも事前予想通りの利上げ幅縮小であり影響は限定的。ペリー総裁会見では2023年の世界景気の成長予測を従来予想から下方修正した一方、成長率は+4.5～5.3%のレンジとし国内経済が堅調に推移するとの見通しを示した。26日からは年末を控えた実需のドル買い・ルピア売り圧力が優勢となりルピアは軟調に推移。28日には中国におけるCOVID-19感染拡大を嫌気し人民元が売られる中、ルピアも対ドルで15700近辺まで下落幅を拡大。29日には月中安値となる15700台半ばまでルピア安が進展したが、同水準ではルピア買い圧力もありルピアは15600台半ばまで反発。15600近辺まで値を戻してクローズ。

■ 今月の見通し

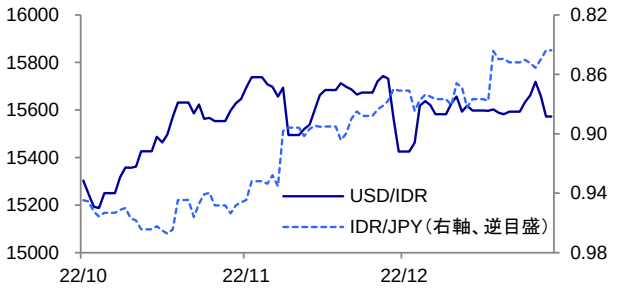
1月のルピアは堅調な値動きを予想。
米利上げペースの減速が確認され、今年前半にも利上げ停止が織込まれつつある環境下、一時的な調整はありつつも基調としてはドル売りが今月も継続するものと予想。先月22日のペリー中銀総裁のコメントにもあったようにインドネシア国内の景気は依然として底堅く、ドル売りの流れには素直に反応し対ドルで上昇するものと予想する。中国における規制緩和・国境開放もルピアには追い風となると考えられるが、その一方で足元で懸念される中国国内での感染拡大には注意が必要か。改めて規制緩和と感染拡大防止の両立は難しいと感じられる一方で、世界的にウィズコロナの風潮が高まる中、再度規制強化とはならず徐々に経済再開へ軸足を移すものと考えられる。感染拡大が取りざたされ、一時的に人民元が売られ、それに伴ったルピア安も想定されるものの、基調としては中国の規制緩和を受けアジア通貨は堅調に推移しよう。
12月の中銀政策決定会合においては利上げ幅の減速が確認された。昨年9月以降、11月まで3会合連続で+50bpの利上げを決定したインドネシア中銀だが、12月会合においては+25bpの利上げとした。昨年来、米国との金利差が縮小し証券投資がインドネシア国外へ流出しているが、米国同様に利上げ幅を縮小させたことで金利差が縮小した状況は継続、もしくは更なる縮小となり、国外からの証券投資の回帰も期待しにくい。この点は引き続きルピア安に寄与すると考えられるが、足許において証券投資の流出を賄うだけの貿易黒字を確保できており、証券投資の流出で直ちにルピアが売られるというシナリオは想定しにくい。足許のドル売りの流れが優勢となりドル安・ルピア高が進展することをメインシナリオとして考えたい。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地のワールドカップ事情』
国際サッカー連盟（FIFA）ランク151位の当地代表チームで、1938年に一度だけワールドカップに出場したことがありますが、1回戦でハンガリーに敗れました。
それでも、サッカーは人気のスポーツです。町を歩いていてもわかります。夕方の横丁を歩けば、ちょっとした空き地で子どもたちがサッカーボールを蹴ったり、ミニゲームをしたりしているのをいたるところで見かけます。また、観るスポーツとしてのサッカーは、もはや国民的スポーツとも言えるほどに人気を博しています。
ワールドカップの時期になると、周囲の話題がみんなワールドカップに変わります。どの国の代表チームを応援するか、どの選手を注目するか、また、どのチームが優勢するかを予想したりします。決戦試合に近づくと、あちこちで試合観戦が開催されます。レストランやホテルなどはもちろん、開催する国によって、当時との時間差が変わってきますが、今年開催するカタールとの時間差は約4時間で、比較的小さいので、試合の生放送を観戦するのはちょうどよい時間なので、近所まで一緒に試合観戦を開催したりします。
（インドネシアみずほ銀行　アストリッド）

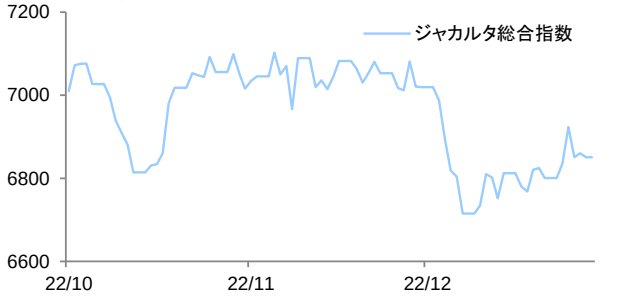
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	CPI(前年同月比)	11月	5.50%	5.42%	5.71%
12/15	貿易収支(USD M)	11月	4,330	5,160	5,593
12/15	輸出(前年比)	10月	9.46%	5.58%	12.30%
12/15	輸入(前年比)	10月	6.32%	-1.89%	17.44%
12/22	BI 7daysリバースレポ金利	-	5.50%	5.50%	5.25%

フィリピンペソ相場

予想レンジ:

USD/PHP	54.00	～	58.00
JPY/PHP	0.40	～	0.43

アジア・オセアニア資金部　マニラ室　榊　雄一郎

■ 先月の為替相場

パウエルFRB議長の発言や米インフレ指標鈍化を受けた米利上げペース減速観測から前月からのドル軟調地合い継続となったほか、11月の比消費者物価指数（CPI）は前年同月比+8.0%と約14年ぶりの水準まで上昇したが、インフレ加速を受けて積極的な利上げ観測が高まったことや10月の比失業率が2019年10月以来の水準まで低下したことをからペソは堅調さを維持。また、原油価格の大幅下落、外国人投資家によるフィリピン株式市場への資金流入、中国のコロナ感染規制の緩和観測によるセンチメント改善といった要因もサポート材料となり、ペソは11月来の上昇ペースを維持し、12月上旬は約4か月ぶりの水準までペソ高が進んだ。

10月の比貿易赤字が33.1億ドルと前月の48.4億ドルから大きく減少となったが、米11月生産者物価指数の上昇や米11月CPIの発表を控えたリスク回避からドル上昇となり、ペソは反落。米11月CPIは鈍化も、FOMCが総じてタカ派な内容となり、アジア通貨全般に売り圧力が強まるも、10月の海外在留労働者からの送金額が29.1億ドルと市場予想を上回り、前月からも増加したほか、比中銀は政策会合にて米利上げに追随し、+50bpの利上げを決定し、メダラ総裁はインフレがターゲットを上回っている状況下、少なくとも今後2回の会合において利上げを停止する可能性は極めて低いとし、緩やかな引き締め継続の可能性を示唆したことからペソは底堅く推移し、中旬にかけては1ドル＝55ペソ台後半での推移となった。

比政府高官が今年の成長率は目標を上回る可能性が高いとの見通しを示したことを好感したほか、日銀が予想外に金融緩和を修正し、円が急騰したことから、広範囲にドル売りが進み、ペソは上昇。メダラ総裁は政策金利のピークは現在の水準よりも高くなるとし、改めて利上げ継続を示唆したことから、22日には約5か月ぶりの高値となる、1ドル＝55.10ペソまでペソ高が進んだが、節目の水準ではペソの上値は重く、中国のコロナ規制緩和がインフレ加速につながるとの懸念からドル反発となり、ペソはクリスマス休暇明けに、月中の上昇分の大半を解消する展開となった。

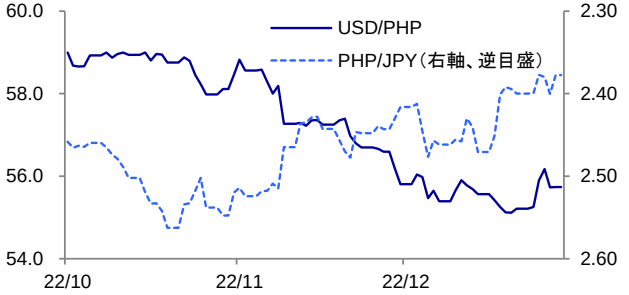
■ 今月の見通し

FOMCは+50bpの利上げが決定され、利上げペース減速となったが、概ねタカ派な内容となった。23年末の政策金利予測中央値が5.125%と9月末時点の予測から引き上げられた。また、パウエル議長は次回会合での利上げ幅についてはデータ次第とし、利上げペース継続と減速の両方の可能性を残したほか、ピーク金利引き上げの可能性やインフレが+2%に向かう確信を得るまで利下げはないとみていると発言している。利上げペースを減速させたものの、政策金利のピークを高い水準に到達させるとの方針は変わっていないことから、インフレ抑制のための利上げ継続、その後、相当期間据え置く政策金利パスが想定され、市場が織り込んでいる早期利下げ観測の修正、緩やかなドル上昇を見込む。

また、フィリピン中銀も米国に歩調を合わせ、利上げペースを減速し、今後も緩やかな利上げ継続を示唆していることから、政策スタンスの差をきっかけとしたペソ高への転換も考えにくい。加えて、フィリピンの貿易赤字は足許縮小に転じているが、依然として高水準であるほかインフレも12月でのピークアウト観測も出ているが、加速が続いている。クリスマスシーズン後の海外在留者からの送金需要の剥落や世界の主要中銀による利上げ継続姿勢を受けた景気減速懸念もペソ下押し要因となろう。

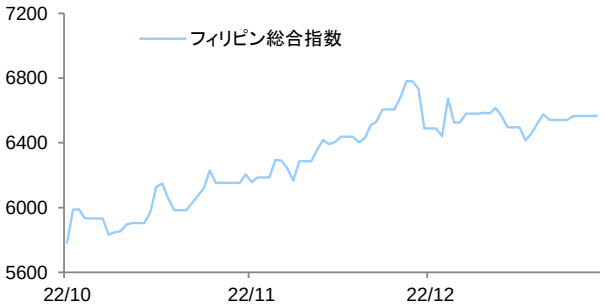
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
上記参照					

インドルピー相場

予想レンジ:

USD/INR	81.00	～	84.50
INR/JPY	1.58	～	1.65

アジア・オセアニア資金部　インド室　田川 順也

■ 先月の為替相場

【12月の米ドル/インドルピーは上昇した】

11月後半からの騒乱を経て、中国ではコロナ規制が修正されるとの噂で人民元は上昇。中国株も急騰する中、リスク選好ムードが広がりルピーに追い風。81.08で12月取引を開始すると、1日につけた80.985が当月ものドル/ルピー相場の安値に。ただ、大台81を割り込んだ時間は2分程度であり、地場石油企業がドル買いを入れているとの話しにすぐに81台を回復。その後も上昇一辺倒で81.75をつけると既存ドル売り勢のストップロスを付けながら一段とドル買いが出る展開。82.00を触るともう一段ストップロスが出て瞬く間に82台後半へと水準を切り上げる。7日発表となった印政策金利は事前予想通りの0.35%利上げとなり、マーケットインパクトは大きくなかった。週末にかけては原油安を眺めながら82台前半に戻して越週。

12日週に入ると前週金曜北米時間に発表されていた米11月生産者物価指数が強い内容となり、利上げ観測が強まると82.75まで上昇。その後も地場輸入企業のドル需要が指摘される中、ドルが堅調。注目されていたFOMCの翌日に振らされる場面では一時的に82.415まで下落するも、押し目買いが入りすぐに水準を戻す。

19日週は83.00手前に張り付く展開で、実需ドル買いが出る一方で上値では中銀からドル売り介入が出るため、結局動きづらい相場に。この頃から市場参加者の間で83.00が防衛ラインとして意識されはじめ、82.85～90レベルで介入のドル売りが出るとの市場参加者の間で話題に。

26日に入ると米寒波による生産減と、ロシアの減産観測から原油価格の反転が一段と意識され、FY2022年間のインド貿易赤字が3,000億ドルに達する可能性が指摘され、ルピーには向い風となったが、上値では介入が意識されたことや、年末で取引主体が少ないことなどもあり、狭いレンジ内で膠着。28日に82.93の当月高値を付けた後、82.865で28日取引を終えた。

■ 今月の見通し

【1月の米ドル/インドルピーは高値圏での推移を予想】

11月10日に発表された米10月消費者物価指数を境目にドル高が一服、その裏側でアジア通貨も全般的に買戻しが入っている状況。アジア通貨インデックスを参照すると11月9日対比で現在3.5%超アジア通貨高を示している。しかし、このグループに属するインドルピーは同期間で1.7%のルピー安となっており、対比期間を多少ズラしたとしても他のアジア通貨対比でルピーのアンダーパフォームが際立つ展開となっている。これはドル主導や中国主導など対外要因ではなくインド固有の要因で、当局が80台や81台でドル買い/ルピー売りの為替介入を行っていることが背景である。介入を行う理由として2点指摘されており、1つは昨年10月のピークから1175億ドル減少していた外貨準備高を再度積み上げるため。実際直近のボトムであった10月21日週から直近発表された12月16日週を比べると390億ドルも増加している。2点目は印中銀が為替変動を嫌っていることから、ルピー安・ルピー高どちらにも振れさせないようにしているという説だ。これでルピー高に行きづらいと見た地場輸入企業がドル買いを入れたことも相まって、83手前まで上昇してきた算段だ。また逆に行き過ぎたルピー安も嫌がっている様相でドル売り介入の防衛ラインとして83.00が強く意識されている状況である。

他の材料としては既に前欄で触れた原油価格の反転上昇。加えて、ラビ作物の豊作に伴った食料品価格低下からインフレが緩和すれば、早期利上げ停止期待の高まりが国内要因としてのルピー安材料。中国の感染者増からの景気減速が注目されれば人民元安からのアジア通貨売りでルピー安要因。

一方、ルピー高要因として考えておきたいのが外国人投資家からの対内証券投資である。12月はインド株が中国の要因によって調整した月だったが、2月1週目の連邦予算発表前に1月は株買いを目しているファンドもあり、海外からの投資が活況となれば、ルピー買い要因になろう。

次回FOMCは2月2日、印中銀会合は2月8日。1月は政策イベントなく、上記のような材料を見ながら現状の高値水準での取引を想定しておきたい。

■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地のワールドカップ事情』

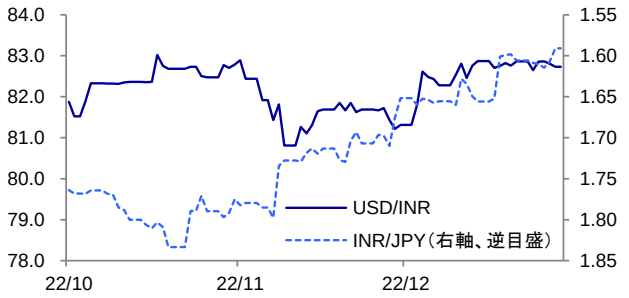
万年すごしやすい高原気候のバンガロールだが、12月は冬にあたる。朝晩は毛布が欠かせず、屋外巡回担当の警備員はダウンジャケットと手袋・毛糸の帽子で武装する。

それでも、大画面でスポーツ中継を放映するスポーツバーでは半袖の客たちがジョッキを傾ける。クリケットの試合がある夜は大盛り上がりだ。FIFAワールドカップにはインドが参加していないこともあり人気はそれほど高くはないが、多くの商業施設で「ワールドカップフェア」が開催され、スポーツバーでも試合が中継された。

筆者は日本人同士で誘い合わせ、ホテルのラウンジを貸し切って日本対ドイツ戦を観戦し、大いに盛り上がった。「4年後もここで見ましょう！」とビールジョッキを持ち上げたが、辞令一つでどこへでも行く日本の企業戦士からの呼応する声が小さかったのはやむを得まい。（バンガロール　木原志乃）

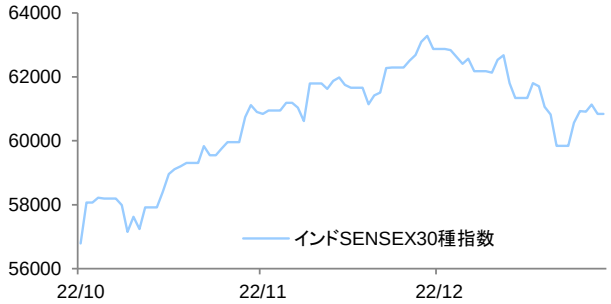
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

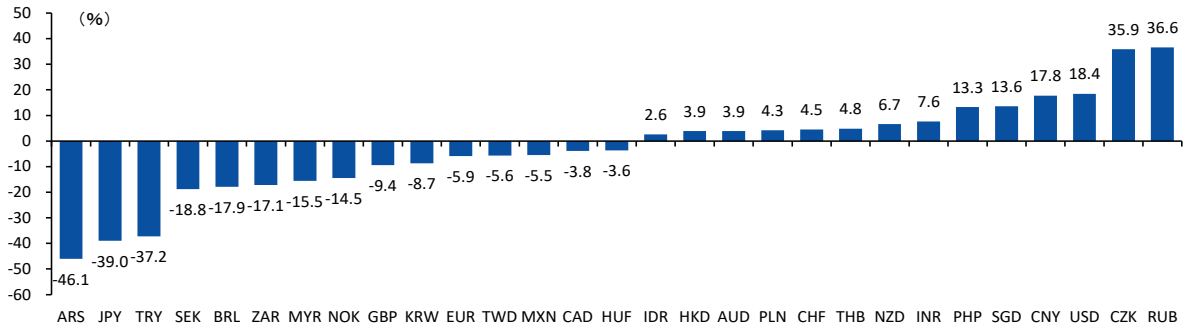
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/1	製造業PMI	11月	-	55.7	55.3
12/7	政策金利	-	6.25%	6.25%	5.90%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2021年末	2022年12月末	騰落率	株式市場	2021年末	2022年12月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	–	–	–	–	NYダウ平均	36338.3	33147.25	-8.8%	–
日本	USD/JPY	115.08	131.12	13.9%	日経平均株価	28791.71	26094.5	-9.4%	-20.5%
ユーロ圏	EUR/USD	1.137	1.0705	-5.8%	ドイツDAX指数	15884.86	13923.59	-12.3%	-12.3%
英国	GBP/USD	1.3532	1.2083	-10.7%	ロンドンFTSE100指数	7384.54	7451.74	0.9%	13.0%
豪州	AUD/USD	0.7263	0.6813	-6.2%	S&P/ASX200指数	7444.642	7038.688	-5.5%	0.8%
カナダ	USD/CAD	1.2637	1.3554	7.3%	S&Pトロント総合指数	21222.84	19384.92	-8.7%	-14.8%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.3561	6.8986	8.5%	上海総合	3639.775	3089.258	-15.1%	-21.8%
香港	USD/HKD	7.7966	7.8016	0.1%	香港ハンセン	23397.67	19781.41	-15.5%	-15.5%
インド	USD/INR	74.3375	82.735	11.3%	インドSENSEX30種	58253.82	60840.74	4.4%	-6.2%
インドネシア	USD/IDR	14263	15573	9.2%	ジャカルタ総合	6581.482	6850.619	4.1%	-4.7%
韓国	USD/KRW	1189.88	1260.33	5.9%	韓国総合株価	2977.65	2236.4	-24.9%	-29.1%
マレーシア	USD/MYR	4.1665	4.4045	5.7%	ブルサマレーシアKLCI	1567.53	1495.49	-4.6%	-9.8%
フィリピン	USD/PHP	50.992	55.741	9.3%	フィリピン総合	7122.63	6566.39	-7.8%	-15.7%
シンガポール	USD/SGD	1.349	1.3395	-0.7%	シンガポールST	3123.68	3251.32	4.1%	4.8%
台湾	USD/TWD	27.674	30.73	11.0%	台湾加権	18218.84	14137.69	-22.4%	-30.1%
タイ	USD/THB	33.211	34.608	4.2%	タイSET	1657.62	1668.66	0.7%	-3.4%

（資料）ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート（REER）の1994年以降の平均からの乖離（2022年11月時点）



■ 実質GDP成長率

	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2021	2022
	（前年比%、*前期比年率%）							（前年比%）	
先進国									
米国*	7.0	2.7	7.0	-1.6	-0.6	3.2		5.9	
日本*	1.3	-1.8	4.9	-1.8	4.5	-0.8		2.3	
ユーロ圏	14.2	3.9	4.8	5.5	4.2	2.3		5.3	
英国	24.4	8.5	8.9	10.7	4.0	1.9		7.6	1.9
豪州	10.3	4.1	4.6	2.9	3.2	5.9		5.3	
カナダ*	-2.3	5.9	6.9	2.8	3.2	2.9		5.2	
エマージングアジア									
中国	7.9	4.9	4.0	4.8	0.4	3.9		8.4	
香港	7.6	5.4	4.7	-3.9	-1.3	-4.5		6.3	
インド	20.1	8.4	5.4	4.1	13.5	6.3		6.5	8.7
インドネシア	7.1	3.5	5.0	5.0	5.5	5.7		3.7	
韓国	6.2	4.0	4.2	3.0	2.9	3.1		4.1	
マレーシア	15.9	-4.5	3.6	5.0	8.9	14.2		3.1	
フィリピン	12.1	7.0	7.8	8.2	7.5	7.6		5.7	
シンガポール	15.8	7.5	6.1	4.0	4.7	4.2	2.2	7.9	3.8
台湾	7.9	4.1	5.2	3.9	3.0	4.0		6.5	
タイ	7.7	-0.2	1.8	2.3	2.5	4.5		1.5	2.2

（注）インドの年間成長率は会計年度（4～3月）。
（資料）ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	22/04	22/05	22/06	22/07	22/08	22/09	22/10	22/11	22/12	2021	2022
	（前年比%）									（前年比%）	
先進国											
米国	8.3	8.6	9.1	8.5	8.3	8.2	7.7	7.1		4.7	8.1
日本	2.5	2.5	2.4	2.6	3.0	3.0	3.7	3.8		-0.3	2.4
ユーロ圏	7.4	8.1	8.6	8.9	9.1	9.9	10.6	10.1		2.6	8.3
英国	9.0	9.1	9.4	10.1	9.9	10.1	11.1	10.7		2.7	10.7
豪州			6.1			7.3				2.9	6.2
カナダ	6.8	7.7	8.1	7.6	7.0	6.9	6.9	6.8		3.4	6.8
エマージングアジア											
中国	2.1	2.1	2.5	2.7	2.5	2.8	2.1	1.6		0.9	2.0
香港	1.3	1.2	1.8	1.9	1.9	4.4	1.8	1.8		1.6	
インド	7.8	7.0	7.0	6.7	7.0	7.4	6.8	5.9		5.1	
インドネシア	3.5	3.6	4.4	4.9	4.7	6.0	5.7	5.4	5.5	1.6	4.2
韓国	4.8	5.4	6.0	6.3	5.7	5.6	5.7	5.0	5.0	2.5	5.1
マレーシア	2.3	2.8	3.4	4.4	4.7	4.5	4.0	4.0		2.5	
フィリピン	4.9	5.4	6.1	6.4	6.3	6.9	7.7	8.0		3.9	5.6
シンガポール	5.4	5.6	6.7	7.0	7.5	7.5	6.7	6.7		2.3	6.7
台湾	3.4	3.4	3.6	3.4	2.7	2.8	2.7	2.4		2.0	
タイ	4.7	7.1	7.7	7.6	7.9	6.4	6.0	5.6		1.2	6.1

（注）豪州は四半期データ。
（資料）ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	22/04	22/05	22/06	22/07	22/08	22/09	22/10	22/11	2021	2022
	（%）								（%）	
先進国										
米国	3.6	3.6	3.6	3.5	3.7	3.5	3.7	3.7	5.4	4.0
日本	2.5	2.6	2.6	2.6	2.5	2.6	2.6	2.5	2.8	2.6
ユーロ圏	6.7	6.7	6.7	6.6	6.7	6.6	6.5		7.7	6.7
英国	3.8	3.8	3.8	3.6	3.5	3.6	3.7		4.6	3.7
豪州	3.9	3.9	3.6	3.5	3.5	3.6	3.4	3.4	5.1	3.7
カナダ	5.2	5.1	4.9	4.9	5.4	5.2	5.2	5.1	7.4	5.3
エマージングアジア										
中国									3.9	
香港	5.4	5.1	4.7	4.3	4.1	3.9	3.8	3.7	5.4	4.4
インドネシア									6.4	5.9
韓国	2.7	2.8	2.9	2.9	2.5	2.8	2.8	2.9	3.7	2.8
マレーシア	3.9	3.9	3.8	3.7	3.7	3.6	3.6		4.6	3.9
フィリピン	5.7	6.0	6.0	5.2	5.3	5.0	4.5		7.8	5.6
シンガポール	2.2	2.2	2.1	2.1	1.9	2.1	2		2.7	2.1
台湾	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.6	3.6	3.6	4.0	3.7
タイ	1.4			1.2						

（資料）ブルームバーグ、Macrobond、みずほ銀行

■ 経常収支

	2021Q1	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2021	2022
	（対GDP比%）							（対GDP比%）	
先進国									
米国	-3.1	-3.3	-3.4	-3.5	-3.8	-3.9	-3.7	-3.6	
日本	3.1	3.9	4.2	3.9	3.7	3.1	2.4	3.9	
ユーロ圏	2.4	2.8	2.8	2.4	1.6	0.6	-0.3	2.4	
英国	-3.1	-2.9	-3.0	-1.5	-3.0	-4.3	-4.2	-1.5	
豪州	3.0	3.0	3.5	3.1	2.3	2.0	1.0	3.1	
カナダ	-1.3	-1.0	-0.6	-0.3	-0.2	0.0	-0.3	-0.3	
エマージングアジア									
中国	2.3	1.9	1.9	1.8	1.8	2.1	2.5	1.8	
香港	9.4	9.8	9.4	11.1	11.8	10.1	11.0		
インド	0.9	0.4	-0.5	-1.1	-1.2	-1.9	-2.7	-1.1	
インドネシア	-0.2	-0.1	0.3	0.3	0.4	0.9	0.8	0.3	0.9
韓国	4.9	5.6	5.8	5.1	4.7	4.2	2.8		
マレーシア	4.5	4.8	3.8	3.5	2.8	2.1	2.1		
フィリピン	3.4	1.8	0.3	-1.8	-2.9	-4.5	-5.8		
シンガポール	16.8	16.7	17.0	18.1	19.7	19.4	19.5	18.1	19.8
台湾	14.6	15.2	14.4	14.6	15.0	14.4	13.8	14.6	
タイ	1.7	0.8	-1.7	-2.1	-2.3	-3.4	-4.0		

（注）インドの年間経常収支は会計年度（4～3月）。
（資料）ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在（%）	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準（%）	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	4.25-4.50	引き締め： 2022/3/16	0.00-0.25	2022/12/14	+50bp	2022/12/14	+50bp
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和： 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2022/12/20	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	2.00	引き締め： 2022/7/21	-0.50	2022/12/15	+50bp	2022/12/15	+50bp
英国	バンク・レート	3.50	引き締め： 2021/12/16	0.10	2022/12/15	+50bp	2022/12/15	+50bp
豪州	キャッシュ・レート	3.10	引き締め： 2022/5/3	0.10	2022/12/6	+25bp	2022/12/6	+25bp
カナダ	翌日物金利	4.25	引き締め： 2022/3/2	0.25	2022/12/7	+50bp	2022/12/7	+50bp
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.65	緩和： 2012/6/8	6.31	2022/8/22	-5bp	2022/12/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.25	引き締め： 2022/5/4	4.00	2022/12/7	+35bp	2022/12/7	+35bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	5.50	引き締め： 2022/8/23	3.50	2022/12/22	+25bp	2022/12/22	+25bp
韓国	7日物レポ金利	3.25	引き締め： 2021/8/26	0.50	2022/11/24	+25bp	2022/11/24	+25bp
マレーシア	翌日物金利	2.75	引き締め： 2022/5/11	1.75	2022/11/3	+25bp	2022/11/3	+25bp
フィリピン	翌日物金利	5.50	引き締め： 2022/5/19	2.00	2022/12/15	+50bp	2022/12/15	+50bp
台湾	再割引金利（公定歩合）	1.750	引き締め： 2022/3/17	1.125	2022/12/15	+12.5bp	2022/12/15	+12.5bp
タイ	翌日物レポ金利	1.25	引き締め： 2022/8/10	0.50	2022/11/30	+25bp	2022/11/30	+25bp
ベトナム	リファイナンス金利	6.00	引き締め： 2022/9/22	4.00	2022/10/25	+100bp	2022/10/25	+100bp

（注）インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

（資料）ブルームバーグ、みずほ銀行